

ナショナリズム批判

——〈スピ・シン主義〉の観点からの、 私の反戦の論理

伊 田 広 行

要旨

私は、自分のアイデンティティを何かの集団（たとえば国家）と同一化することで得ようとは思わない。あらゆる〈国境〉を超えようとするのがシングル単位論だからである。しかも実際のリアルな戦争は、悲惨な面と熱狂・快樂の面をもっている。だから国家と同一化する熱狂を嫌悪する私は、反戦・非戦の立場を選択する。侵略支配謝罪責任問題でも、現時点ですべきことと未来に向かう観点から、これから私はこう生きるという宣言として謝罪する。

確かに反戦を叫ぶだけで何もかもが解決するわけではない。「正義の戦争」といった「現実主義」の論理には一定の説得力がある。人権侵害がなされている状況に対し、無関心を決め込むべきだとはおもわない。だがそれにもかかわらず、私は非暴力主義的な闘争を選択する。〈逃げる〉という〈弱さ〉にこそ希望があるという価値には、魅力がある。それもまた世界へのひとつのかかわり方である。それを論理的にも現実的にも、否定することは誰にもできない。無抵抗非暴力主義という非戦・反戦の論理も、また、ひとつのリアルな選択肢であり、それをナイーブな感情論と排除することは愚かである。

目 次

はじめに

- 1 〈国境〉を越えられるか
 - 1-1 ナショナリズムとアイデンティティ
 - 1-2 〈国境〉を肯定するか否か
- 2 リアルな戦争
 - 2-1 湾岸戦争にみるナショナリズムの論理
 - 2-2 戦争とは
 - 2-3 戦争責任と謝罪
 - 2-4 従軍慰安婦問題
- 3 私の選択する価値

- 3-1 保守主義への向かい方
- 3-2 〈日本〉への絶望を通過して
- 3-3 「現実主義」ではない、私の選択——逃げる非武装・非暴力主義

キーワード：〈国境〉，リアルな戦争，無抵抗非暴力主義，〈弱さ〉，〈逃げる〉こと

はじめに

ナショナリズムや戦争に関する問題は数多く語られてきた。すでにすばらしい本も活動もたくさんある。私は専門家でもないし、十分にサーベイした上で特別目新しいすごいことを提案するわけでもない。ただ、〈スピリチュアル・シングル主義〉を提唱するものとして、最低限、自分の立場を表明しておこうと思う。それが昨今のきな臭い空気の中で、私があなたと対話する出発点となると思うから。

1 〈国境〉を越えられるか

1-1 ナショナリズムとアイデンティティ

ナショナリズム的神秘主義に弱い日本

〈スピ・シン主義〉を提起したい僕は、同時に、〈スピリチュアリティ〉のようなことを語るその危険性——まがい物との区別——についても声を大にして伝えたい。とくに、昨今の日本に広がる、個人の責任を問わない、思考停止的な、右翼的な、ナショナリズム的な、低レベルの神秘主義的な傾向に対する批判は、日本人であり日本で発信する僕にとって重要な課題である¹⁾。

ここでいうナショナリズムとは、日本という国家と自分を同一化する思考のことである。国家などというものは、本質的なものではなく、構成主義的なものつまり幻想であると私は捉えるので、国家や民族を絶対・本質視するナショナリズムには私は最初から共感できないのであるが、この点を〈国境〉を超える〈スピリチュアリティ〉

1) サッカーやバレーボール，世界水泳，オリンピック中継の「ニッポン応援」は一体なんだ？（「がんばれ！ ニッポン」「惜しいー。そこだ。行け！ ヤッター！ 最強の日の丸軍団！」「燃えろ大和魂！」「たくまじき日本の大和撫子」「日の丸をつけたら国のために頑張るもんですから」）。皇太子・雅子結婚（皇室）・出産報道はなんだ？「日本人に生まれて良かったと思います」，「歴史の1ページに立ち会えたよろこび」。皇室結婚報道ではそれをちゃかすナンシー関がいちばんマトモだったが、これってどういうことだ？

そして、戦争責任，従軍慰安婦問題，教科書問題についても、ナショナリストが恥ずかしい言動を繰り返している。戦後の戦争の総括の主流は「反戦」も含めて、「私たちは犠牲者だった。こんな戦争はもうこりごり」でしかなかった。これは、戦争に勝っていれば出てこないレベルの「総括・反戦」でしかない。日本人全体が、どこまでも自分に甘いのである。

という視角で少し考えてみたい。

「精神性や自然を大事にする」というようなことが、日本では簡単に「先祖を大事にすること」や「天皇は神様」「神風がふく国」「田園と森の民である日本人」「日本の自然はすばらしく日本人は世界でも最高の自然愛好家であり、自然との調和こそが世界に誇れる日本独特の伝統である」のようなことに結びつけられ、結局「日本（人）や東洋の優越性」へとすりかえられていくことが多い²⁾。また、精神性重視、西欧合理主義批判から、神仏習合・神道発展への期待、東洋・「気」などを評価するいいかげんな神秘主義・曖昧主義へずれ込むものも多い。ユング心理学などをベースとした河合隼雄氏などの議論が日本でもてはやされていることも、そうしたいいかげんな神秘主義に弱い日本の体質の表われである（河合氏は、重要な指摘をする側面をもちつつも、繰り返し日本的なるものを論じ、合理的思考を批判し、日本の保守層にも心地よく受け入れられるようなことを発言している）。「左翼・革新の側」（？）などといわれる『朝日新聞』も、河合隼雄的なものには全く無抵抗（後押しばかり）である³⁾。

そこでは観念論対唯物論として議論されてきた世界認識の問題を、簡単にどちらも「分離の上で一方を優位に置く還元主義である」と批判して、安易に「第三の道」のようなことをいいつつ、結局いいかげんな観念論に陥っている——「理屈では割り切れないのだ」——という構造のものがほとんどである。もちろん観念論対唯物論を、昔の議論のまま、どちらかだけを正しいというようなことは単純化でしかないが、長い論争の深い内容理解をふまえずに、安易に切り捨てる浅はかさが問題なのである。これは科学と宗教を対立させ、科学を矮小化した上で批判する姿勢である。つまり唯物論や科学的思考を深く理解できないままそれを単純に「物質重視、精神軽視の近代的合理主義、科学主義」と見くぶり、切り捨てて恥じないという無知な言動となってい

2) 日本の考古学ブーム、「日本人論」「声に出す日本語」人気は、こうした自己のアイデンティティ探しを民族に求めようとするナショナリズムの動きのひとつという側面をもっている。

3) 例えば、河合氏が97年度朝日賞を受賞したことを記念して98年3月に『『日本人』という病を背負う私』という彼の講演会が催され、『朝日新聞』にその要約が、『論座』98年6月号に全文が掲載されている。ところがその中身というところをつまらぬ。しかし確実に日本主義ナショナリズムや非合理主義を煽り、スウェーデン的改革、フェミニズム的改革の足を引っ張っている。例えば、日本の改革を「外」から言う人は「日本人という病」が分かっていないと切り捨てる。これは現状肯定論にすぎないが、その保守主義を彼なりの理屈で正当化するのである。立場は明らかではないか。僕が好きな山田太一氏も、フェミニズムに関しては河合氏の『とりかえば男と女』に賛同してしまっている。そして、河合氏を通じて、日々、ユング心理学的非合理発想が広められている。河合氏の国家主義的危険性は、2002年の『心のノート』でようやく明らかになりつつある。これまで河合氏を支持してきたものは反省を迫られよう。

るものが多い。しかしそれでは何も積極的なものは生まれず、ただナショナリズムや神秘主義をはびこらせるだけだろう。

シングル単位論の視点が重要

大切なことは、近代の徹底と合理的な思考をベースにしつつ、その近代の狭い認識の部分乗り越えるような制度と精神スタイルを考えていくようなこと、その限界をふまえた豊富化の営み——例えば「混沌の闇世界」も考慮にいった、枠組み拡大やパラダイム転換等——が積み重ねられることだろう。〈スピ・シン主義〉というように〈スピリチュアリティ〉を「シングル単位論」と結びつける意図はここにある。制度（社会構造）が精神のあり方やアイデンティティを規定する側面の重要性を忘れる議論は、全然実際的ではない。人間や自然を論じていく際に、私はまず何よりスウェーデンのような具体的・实际的な制度改革を積み重ねることを重視したい（シングル単位論）。その制度は、非常に大きな影響を精神上にも与える。制度には精神が宿っている。ここを抜きにしてはなにも始まらないし、始めてはならない。その上で、個人の真の多様性や〈たましい〉といった精神性を考えたい。

これは、宗教や新霊性運動などにある欠点を意識するときに更に明瞭となる。大方の俗流宗教などは、理性的論理を軽視し、絶対者（最終解脱者など）の承認（帰依）といった「非合理」を直感の名のもとに受け入れさせる構造を持っている。私は、理性絶対主義を乗り越えるスピリチュアルな感覚を重視したいと思うが、同時に、その危険性を意識するので、いいかげんな「身体性」や「直感」などでごまかすことは断じて承認できない。

理性によっても、完璧な把握はできない。しかし、だから主観（感情、直感）ですべてオーケーということでもない。自分と世界を深く見つめることが必要である。自分と世界を見つめるとは、自分の生の感情や深層意識を大事にすると同時に、自分を世界の一部として、生態系全体・環境ごと捉え、一体何が起きているのかを、多面的に、そのまま曇りなくみることである。客観的存在として自分はある。

人間は、その状況を完全には把握できないが、できるだけ、多様な角度からの情報を総合して、自分の狭い認識の限界を少しでも越えて、自分の目と頭と皮膚と耳と鼻と口、つまり全身身体を通しつつ、認識境界線を拡大していくことが必要である。それがトータルな、主客統一的な把握ということのひとつの意味であり、そのとき、他の人々がどう考えているか、どのような制度や法律があり、どのように社会が動いているか、自分の言動はどのように人に評価されるのか、実際に行動したときに与える影響・生じる結果はどのようなことかといったことは、認識の重要な一部である。そ

うした客観性に近づこうとする努力のない、たんなる狭い自分の妄想と区別のない「主観」による「把握」を「直感」などといってもちあげるのは愚の骨頂である。

ナショナリズムと共同体

精神やアイデンティティを抽象的に何かとの同一化によって求めるようなこと自体が罨である。人間は個別特殊性を持った社会システムの中に生きている。そこを見落とさないならば、自分がどのように制度に規定されて今の意識をもっているか、そしてそのなかで自分という個人が何をなしているのかという徹底した孤独な自己分析がいる。社会との関係を批判的に意識せず、深く自分を見つめない議論は幼稚である。

ところがはびこっている議論は、むしろ人々の「自分への不安、寂しさ」に付け込んで、「あなたは日本人だよ」「あなたの悩みの源泉は母親／父親との愛情が少なかったからだよ」「日本人は特別優れているよ」「悪いのは外国人（どことこの国）だよ」というような安易な主観的安心（解答）——本質的に言って妄想——を与えるようなものばかりである。自分を問うことが、自分の属している集団（国家、民族、会社、家族等）の確認——〈国境〉の確認、上位集団への自己同一化——にすり替えられている。そしてそれは同時に、〈国境〉の壁を高くすること、すなわち自分の民族への誇りを持つことの当然視、そうでないものの排除、異質なものへの不寛容（多様性概念の無理解）という形を伴っている⁴⁾。

ナショナリズムへの逃避という安易な動きが近年日本でも非常に強くなっているのは、確かなものがないという不安の中で、アイデンティティを（主観的に）問うことがいいことのように思い込まされ、それを国家や会社や家族などの共同体への自己同一化に矮小化し、こうしたすりかえに無頓着な者が増えているためである⁵⁾。だが、

-
- 4) 西欧・大洋州の極右政党が「日本を見習え」と唱えていることを考えなければならない。彼らは日本の国籍取得における外国人の困難性、難民・亡命申請に対する極端な消極性、国内の外国人（住居者・労働者）への人権軽視、などをみて、「我々極右の言っていることは的外れではない。なぜなら日本はそうしているではないか」といっている。「異文化の国からきた人間はわが国の文化になじまない」という形で人種差別を正当化しようとする極右政党の主張と、日本でよく見られる日本文化論との類似性は偶然ではない。
- 5) 鈴木光司 [1995]『らせん』のラストには、ナショナリズム的発想が出ている。「一つのDNAに統一されれば、固体差はまったくなくなる。すべて同じ体型、能力や美醜の差もない。愛する者への執着もなく、戦争どころか喧噪も起こらない。生と死を超越した、絶対平和の平等な世界。死はもはや恐るるに足らず。なあ、おまえたちは、それを望んでいたんじゃないか」と高山竜司が語るのに対し、安藤は、息子の存在の特別性をもってそれを心の中で否定する。息子と他の人間を同等にはみれないと自信をもって考える。崩壊しつつある世界を目の前にして、唯一確かなのは腕の中の息子の鼓動だけだと（370—3ページ）。

他者を排除・蔑視し、仲間だけで慰撫しあうことで得られる自己満足・自尊心とは、優越感であり、自己陶醉でしかない。比べて優越しないと満足できないというのは、自信（エンパワメント）のなさの表れである。自信がなく、自分がないものだけが、自分の肯定のために、国家などと自分との同一化にすぎるのである。

しかも、ナショナリストに共通の思考経路は、祖国と祖国の旗への深い愛情（身体性に基いた理性を越えた感情！ というようにナショナリストなら位置づけるもの）から、それを守るために闘うべきと考えており、それに対する人道主義者、平和主義者の姿勢——「勇氣（これも理性からは生まれない美しいものというだろう）のなさ」——に憤りをもつ、そして「平和主義者は過去に国家・同胞のために死んだ者を貶め^{おとし}ている」というように怒るといふものである。つまり、「人生の男性的な面」を平和主義者は理解しておらず、その意味で平和主義は「女性的」という欠点を持っていると見ている⁶⁾。

『らせん』全体がそうだというのではないが、このラスト部分には、まず戦争批判や平和志向や平等志向（能力差別批判、美醜差別批判）を、均一志向に単純化し、そこには多様性がなくつまらない社会だというニュアンスを込めて批判するというレトリックがある。そして、それに対抗して、他者よりも大事な、自分が実感できる「自分の子ども」「子どもの鼓動」というものをすべての出発点に据えることで、不安定で不確かな世界に立ち向かうことができるという価値観を対置する。

だが、当然のことながら、平等志向（差別反対）と、多様性の否定とは同一ではない。逆に、人間の多様性の相互尊重から、人間の平等（優劣の否定）をいうのだ。それに対して、ナショナリズム的発想では、平等は自己アイデンティティの否定のように感じられるので、「多様性＝差別（優劣）」こそが生き生きとした世界には必要とみるのである。したがって、優劣という事実を認めるべきという点が強調され、その上で自己（自分の共同体）への愛と自尊という主観を唯一の根拠として、自己の優位を確信する。つまり、愛とは決して自己以外（他者）には向かないものとなる。

『らせん』ラストにはこのナショナリストの論理との類似性が見られる。我が子を「特別視」する根拠はないにもかかわらず、ただ自分の主観、愛という感情、鼓動という身体的認知をもって正当化するのである。身体も愛も主観も、それ自体は人間に不可避であろう。ナショナリズムになるか否かの分水嶺は、その認識（感情）を、自己（共同体）を超える〈国境〉外部にまで、世界全体にまで及ぼすか否かである。『らせん』は、〈国境〉外部よりも「我が子」を絶対的に優位におくという志向を正当化したという意味で、展望に関わる世界観において、こうした単純なナショナリズム（主観主義）を採用した作品であるということができよう。

- 6) ル＝グウィン [1986]『所有せざる人々』の中で、ナショナリストであるアトロは、祖国が脅威に際したときの人々の鋼^{はがね}のような気持ち、祖国の旗、隊列を組んで進む様はすばらしいといい、それに対して、オドー主義は女性的で、人生の男性的な面を無視している、オドー主義は勇氣というものを理解していないと批判する（370ページ）。そして、たしかにオドー主義には「国境」の象徴たる「旗」はない！

1-2 〈国境〉を肯定するか否か

〈国境〉を越えて

ここに対立軸は明確となる。暴力の肯定、男らしさの肯定か、あるいは非暴力主義、反マッチョ、つまり〈女性的〉であるか否かが対立軸である。そして、さらに本質的には、あらゆる〈国境〉をなくしていこうと志向するのか否か、すなわちアイデンティティを徹底して個人に限定するシングル単位論者、ジェンダー解体論者⁷⁾、国境・民族解体論者、つまり理性的なアナキストになるか、そうでなく、アイデンティティを何らかの共同体幻想との同一化にもっていくかである。

アイデンティティを問うことと民族の文化の根源を問うことは同じではない。国民や民族というアイデンティティは近代に作られたものである⁸⁾。自分個人のアイデンティティというなら、もっと具体的に、自分と社会の関係を深く見詰め、自分個人の独自の生き方（生きる質としてのシングル単位度とスピリチュアル度）を深めることだ。だがそれには力が必要なので、安易さだけがはびこって、ナショナリズムがそこに付け込んでいる。「自己の寂しさ・孤独に耐えられずに自己を集団アイデンティティに溶け込ませる甘え・逃避」が、ナショナリストにはある（孤独論の第1段階、プレ自立段階の発想、拙著 [2003b] 参照）。その意味でも、あくまで多様性、独自性、そして孤独にこだわるシングル単位論の視点、〈国境〉を越えて共通する〈たましい〉を見つめるスピリチュアルな視点が必要だと思う⁹⁾。

私は、あらゆる〈国境〉を必要としない。そういうスタンスで生きたいと考えている。すなわち、私には愛国心などない¹⁰⁾。日の丸への愛着はない。天皇制反対論者で

7) フェミニズムとは、「家族とジェンダー」という〈国境〉を越えようとする志向である。

8) 領土、主権、国民的アイデンティティを有する国民国家ができたのは15世紀以降に過ぎず、特に今日のような国民意識が広まったのは大方の国で19世紀から20世紀である。国語の確立、普通教育、参政権、国家規模の徴兵・徴税、インフラ整備（郵便制度、水、電気など）、国旗・国歌制定、社会保障的制度等によって多くの人が「自分は……国民だ」というようなナショナルな感覚をもつようになったのはつい最近のことなのである。つまり、伝統は創造されたのである。（山下恒生さんの学習会レジメを参考にまとめた）。

9) 日本人は単一・均質の民族というのは間違いである。遺伝子レベルでも多様な種族・民族のまざったものということがわかっている。そしてもちろん個人差があり、かつ世界のどの種族・民族も少しの遺伝子の差異に過ぎない（ほとんど共通）。当然、日本人（自分たち）だけが特別・優秀というのではなく、他民族とちょぼちょぼだということである。根源的にいって、日本人という概念は抽象的な幻想（社会的構築物）であって、実態的・絶対的には「存在」しない。

10) 『闇の左手』の「惑星〈冬〉」のエストラレーベン言葉は豊かである。「国家を憎んだり愛したりすることができますか？ ……私はその国の人間を知っている、その国の町や農場や畑や丘や川や岩を知っている。……しかしそうしたものに境をつけ、名前をつけ、名前をつけられな

ある。マッチョ的・男性的であるべきと思っていない。非暴力主義、「弱き者」から学ぶものがあると思っている。父性と母性，男らしさと女らしさ，男性原理と女性原理の双方を残し肯定したまま尊重すればいいなどと思っただけでなく，二分法自体を批判する。

日本文化や東洋思想が優越しているとも思っていない。日本の自然が特に美しいとも思っていないし，日本人が特に自然愛好主義ともおもっていない。日本が特に自然との調和を重視してきた国とも思わない。そんな幻想は，ほんの少し世界の現実を見れば分かる。つまり私は「〈国境〉妄想家」ではない。フロイトやユングばりの心の「型」の確認，「物語」の消費で安心する精神でもない。愛校心も，愛社精神もない。私は大阪出身だが関西優越主義者でもない。両親や兄弟や祖母を愛しているが，血縁重視の家族主義者ではない。子どもを自分の分身とはおもわない。「伊田」という血縁や名字に愛着はない。愛する人を「特別な伴侶＝妻」「永遠のパートナー」と呼ぶような精神構造を持っていない。「運命の出会い」とか「一生愛する」という言葉を信じ込むほど無知ではない。結婚制度に依存しない（結婚制度廃止論者）。

つまりアイデンティティを，なんらかの集団や秩序や区分と結びつけて確認したいのではない。「集団に属する快感」という「直感」を単純に肯定するような思考をしない。多数派（マジョリティ）に属することを優位視するナショナリスト，レイシスト（民族主義者）とことごとく異なる発想である。だからこそ，男／女らしさというジェンダーを脱構築するフェミニズムに共感する。そして孤独を前提とするニヒリズムや虚無的な感覚の上に，連帯や「新しいつながり／愛」を模索したい。国籍，民族，宗教，性，性的指向等，それら多様な属性を備えた「私」と「あなた」の違いは，尊重しあうべき個人差である¹¹⁾。孤独を怖がって，強迫的に「どこに属するのか」と，自分が属せる「マジョリティ探し，共同体探し」に追い立てられる生き方はやめたい。

いところは愛してはならないというのはどういうことだろうか？ 国を愛するとはいったいどういうことだろうか？ 国でないものを憎むということだろうか。そうだとしたら，いいことではない。……私は人生を愛する限りエストレの山々を愛するが，この愛には憎悪の境界線はない。その先は憎悪でなく，無知なのだと思う。……悪い政府を憎まないのは愚か者です。そもそも地上によい政府というものがあるなら，それに奉仕するのは大きな愉びになるでしょう」ル＝グウィン [1978] 226-7ページ。

- 11) もちろん，私はあらゆる〈国境〉を超えたいと志向するものであるが，同時に現実的には私はあらゆる属性に規定されて自己アイデンティティを形作ってきたし，今もそれを残していることを認める。例えば私は自分を男性と自覚している。過去，侵略戦争をしてきた日本国の一員でもある。大学教員という肩書きを背負っている。その属性を引き受けて，それにどのように立ち向かうかが私の個性であり，その時私は近代的〈国境〉を超える方向を志向するといいたいのである。

それは、秩序の上位にいくことで幸せになれるという近代主義的発想を一步も抜け出してない¹²⁾。私ももちろん完璧に様々な囚われ・幻想から自由になっているのではないが、そこに居直るのでなく相対化し、自分の限界を解体していこうとしており、そうした様々な意味の総体として、シングル単位を指向している。私は、「共同体や秩序が与えてくれる幸せ」を拒絶するアナーキストの道を〈スピ・シン主義〉として提唱しめざしている。日本の知識人のナショナリズム的傾向——古い秩序へ戻りたいという懐古趣味——と正反対である。

思考停止と文化的特性論

以上のことを、別の角度からまとめておこう。日本でも「個人」対「集団」は語られてきた。しかしそれは日本の「特徴」として、「文化」としてのみ語られてきた。「特徴」「文化」とすることで、「容易には変えられないもの」「伝統に基づいた風土、前提」というニュアンスがつけられ、自分にとって正しいか正しくないか、変えるものかどうかという視点がなくなった。その文化条件の中での解釈、前提条件としたうえで「対策」を考えるというものになったのではないだろうか。少なくとも理論的には、それ自体を考えなかった。無意識部分を意識化するということが、その具体化、政策論がなかった。心の問題、意識の問題、心性の問題、発想の問題として、「個人意識が日本では成熟していない」というような文化論、日本人論だけが語られ、それだ

12) 「多発する外国人犯罪」といった非常に非科学的な扇動が連日メディアを通じてなされている。「備えあれば愁いなし」という単純な理由で敵国からの防衛をすべきだ、自衛戦争準備だと軍備増強派が声を荒げる。大学入学資格を与える外国人学校の対象を、米国と英国の学校評価機関の認証を受けたところのみ認めると文部科学省は決め、朝鮮学校などアジア系卒業生への差別が公然とまかり通る。2003年4月に内閣府が発表した「人権擁護に関する世論調査」によると、在日外国人について、日本国籍をもたなくても日本人と同じように人権を守るべきだと考える人は54%で、6年前の65.5%から大幅に低下していた。外国人が不利益な扱いを受けることについては、「差別だ」が30.4%で前回比で9.5ポイント低下し、「風習・習慣や経済状態が違うのでやむをえない」が28.3%（同2ポイント増）であった。

あれだけ「拉致は人権侵害だ」といいながら、「脱北者」や難民や外国人をうけいれようとしない政府・外務省、そして多数派国民とは、なんなのか。人権侵害を自国民の一部にだけ限定し、自分たちの加害者性に目をつむる者たちの愚かさ。拉致問題を叫ぶナショナリストも、安易に脱北者をうけいれるなという。条約難民・政治難民ではないが、人道的見地から、ひどい自国を出て他国に移りたい、逃げたいという人を、国籍に関係なく保護すべきと考えるのが、人道主義ではないのか。国際的に大量の難民を受け入れる義務があるのに、日本は全く排外的なままで、入管管理体制もひどいままである。03年に議論されている入管難民改正法案もひどいものでこれまでの消極性を維持したままである。日本はなんという狭量、身勝手な国であろうか。

けだった。そしてしばしば、日本の特徴として外国人に説明され、美化されるものとして、「外国人にはわからないもの」として、結局、日本的な「あいまいなもの」が肯定、正当化されてきた。

「文化」の問題となれば、「正しい」「間違っている」といった議論の水準にはならない。せいぜい「意識や考え方、教育を変えよう（しかし、文化的なものは根強いから変えるのはむづかしいね）」で終わる。これに白人・西欧・先進国中心主義批判、単線史観批判が加わる。“東洋的なもの、日本的なもの、仏教儒教的なもの、アジア的なもの、日本人論的なもの”という方向に、「議論」が進み、非政策論の方向へいった。あまたの“日本人論、会社主義、集団主義、縮み思考、間人主義、菊と刀、富士山、茶道、花道、柔道、相撲、武士道”などを語ることが流行り、その歴史的起源、由来などの説明に分量を割き、それだけだった。歴史を語る時の分析視点に無意識を暴く意識性、立場性がなかった。異なる文化と真にコミュニケートしようとする意志——普遍性を語る姿勢——をもたなかった。現代でもスポーツ記事などにあふれている「国家を背負う気持ち」「日の丸・君が代」「郷土愛」「愛国心」「母校への愛校心」などを、ポスト・モダン、「幻想」批判の水準で根本的に批判しなかった。戦争責任をあいまいにしてきたこと、天皇制の存続、家制度の存続、自民党的な政治体質は、すべてこことつながっていた。

結局、思考停止を、文化特殊性の名の下に、美化・温存し、社会改革上では、本質的には現状肯定しただけだった。そうした現状肯定や無意識への追従が、「知」「学問」とされ、のさばってきた。ある意味で、合理的な政策論ではなく、文化至上主義論、観念論の文学であった。確かに、「正しい、間違っている」は、アプリアリ、絶対的には語れない。しかし、選択の問題として、「あなたの立場、価値観で、どちらの方向、政策を選ぶか」という議論——シングル単位論的な戦略論議——はできたはずなのに、それをしなかった。「お互い分かり合える日本人」だから、異質な個人を単位にしようというシングル単位論は、冷たい議論にしか見えなかった。だから日本が性差別のない社会に変わるはずがなかった。これを理論的・思想的敗北と言わずして、何と言えよう。

新靈性運動とナショナリズムとの親和性

拙稿 [1999] において新靈性運動を「エゴイズム性に無批判的である」という点で批判したが、このことは、新靈性運動がナショナリズムと結びつくときにも同じ欠点を浮かび上がらせる。「靈性」や「自然との調和」において日本や東洋の突出した素晴らしさを言うのは、まったくの無知あるいは意図的な嘘である。「靈性」や「自然

との調和」性は世界中でみられる概念であり、日本文化が特に優れているなどとはいえない（現実には、日本は世界でもっとも自然を破壊している国の一つである）。まともな新霊性運動の積極性のひとつは、「自民族中心主義、自民族の文化優越主義、人間中心主義」といった傲慢さ（エゴ的認識）の批判、そして当然ながら独裁的支配的政治への批判にこそあるはずである。そして社会対立を克服する展望を、多様な個人や民族の相互尊重、相互寛容にみるもののはずである。

「世俗化による共同性破壊」に危機感をもつのは分かるが、そこからただちに伝統的価値観（国家主義・民族主義）の尊重という保守主義に逃避してことが解決するとみるのは知的怠慢である。伝統的価値観に内包されていた抑圧性・差別性に立ち向かう理性が必要である。ましてや、近年のように、ナショナリストらが口汚く従軍慰安婦の人たちの人権回復運動を罵っているとき、魂や霊性をいうからには、その精神を社会的な活動として示さなくては嘘である。

つまり、靖国神社参拝を近隣諸国の反対にもかかわらず強行する小泉首相や石原慎太郎都知事や「新しい歴史教科書をつくる会」¹³⁾や「君が代を歌え、日の丸を掲げろ」と教育現場・議会に強制する¹⁴⁾などのナショナリズムな動きに、反対の姿勢を見せる

13) 「新しい歴史教科書をつくる会」は、その結成にあたっての声明文・記者会見（1996年12月2日）において「慰安婦」問題の記述全体の削除などを要求した。「新しい歴史教科書をつくる会」をすすめる人たちがどのような人なのかを示すエピソードを紹介しておこう。同会の会長である、西尾幹二という学者が、2001年2月19日に藤井寺市において、「公開例会『時は熟した』地域教育へのかかわり『日本の歴史教育と未来』」（主催・社団法人藤井寺青年会議所、後援・藤井寺市・青少年健全育成藤井寺市民会議・新しい歴史教科書をつくる会・株式会社産経新聞社）と題した講演会を行った。その中で西尾氏はジェンダー教育に関して言及し、「ジェンダーフリーを主張する団体や異性装をする人々は『間違い集団』である」や「セクシュアル・マイノリティの人権など守られなくてもよい」という趣旨の差別発言を繰り返した。その一部を引用する。

「ハラを抱えて笑うようなことを最後に紹介します。やっぱり間違いの集団だと言うことがすぐわかります。このグループの研究方法として、ジェンダーは着るものから徹底する衣装と化粧ということで、男が女の衣装を着たり、化粧を塗りたくっている男たちがいたりしている。写真でははっきりしませんが、これはゲイボーイの集団ですよ。異常でしょ。こういうものに東京都が金を出して、研究させている。これが日本の教育へどんどんどんどん入ってくる。……」（「日の丸・君が代による人権侵害」市民オンブズパーソン（<http://member.nifty.ne.jp/eduosk/nisio-kougi.htm>より引用）

こうした発言をする人が、〈スビ・シン主義〉で追求しようとしている「新しい人権概念」を理解しているとは思えない。西尾氏も、「学者」なのだからある意味「頭はいい」のだろう。権威も地位もある人だ。何が私たちと違うのだろうか。〈たましい〉の差である。

14) 一例をあげると、2002年6月に横浜市議会で日の丸掲揚に反対する機会を与えられなかったために抗議活動（本会議での議論を求めて、本会議開会前から事務局長席と議長席に6時間、強

ことこそ、〈スピリチュアリティ〉の発現である。そうした現実政治とのスタンスを選びとっていくことがないような、「新霊性運動」など、社会性から逃避して自分の観念世界に閉じこもっているだけのつまらぬもの——時には差別主義者に利用される反動的なもの——である。日本の新霊性運動家の中で、日本文化の優越視、神道の再評価などを行っている者は、私にいわせれば「スピリチュアル度が低い」といえるし、ましてや天皇制擁護や第二次世界大戦の日本の侵略の肯定などと結びつくものは、愚かである。それは、ナショナリズム的な「自己の寂しさ・孤独に耐えられずに自己を集団アイデンティティに溶け込ませる甘え・逃避」の発露に過ぎない。私が捉える〈スピリチュアリティ〉とは、このように現実的事態への対処の仕方に反映されるものである。

2 リアルな戦争

2-1 湾岸戦争にみるナショナリズムの論理

ナショナリズムについて、片岡義男氏はその本質を見抜きそれを言語化している者のひとりである。彼の湾岸戦争についての記述は、反テロ戦争・反イラク戦争を仕掛けたブッシュ・ジュニア登場の今日においても、日本のナショナリズムを警戒するに当たっても示唆に富むので、ここでその要約を、私の感想も交えて、紹介しておきたい¹⁵⁾。

湾岸戦争でのアメリカ

世界は多極化していない。アメリカというボス——警察官気取り，エリート気取り，No.1気取り，世界の中心気取りのボス——が支配している。それに文句を言う者がいない。米国は世界のシステムを真に協調的なものにするに依然として興味を持っていない。「自分たちの政治や経済，文化などのシステムだけを，良くて正しい唯

制排除されるまで座る)を行った2議員が、懲罰にかけられたあげく、議員除名までされた「事件」がある。この問題の根深さは、当初、こうした抗議活動を擁護すべき勢力までが保守勢力とともに動いたことである。最初共産党は「日の丸」強制掲揚問題と切り離して議会制民主主義を乱したとして懲罰に賛成しており、神奈川ネットも「日の丸」強行の評価をとばして議長席占拠と懲罰を同列に扱うなど、抵抗勢力までもが腰砕けになった(両者は除名には反対したが時遅し)。時には議会の枠を越えて戦うというような発想が共産党議員などにならないためにこのような暴挙を許したといえる。「日の丸」発言の議事録からの削除も行われた。マスコミも偏った報道をした。思想信条の自由の精神がわかっているとは思えない。

15) 以下、この節の湾岸戦争に関する内容は、片岡義男 [1997]『日本語の外へ』中の「湾岸戦争を観察した」をベースにしたものである。

一の在り方とみている」という片岡の指摘は、2003年現在も生きている。ソ連のあとにイラクや北朝鮮＝「悪の枢軸国」「テロ支援国」という悪を作って、世界の自由と平和を守るためにそれら悪者と戦うという構図はなんら変わっていない。自分たちだけが正義であり、常に自分が正しく間違わない、そして、だれもそれを疑っていないと信じるといふ恐るべき忌まわしさと傲慢さを、他の例で考えるのは困難だ。

それほど、馬鹿げている。しかし巨大すぎて、だれも全体像をつかみきれない。米国のマスコミ、報道といっても、この程度のものにすぎない。映画に代表されるものに、そうした能天気な繰り返しが繰り返されている。その意味で、全体としてのアメリカという国家は愚かであり、ほとんどバカである。それをうれしそうに消費するしかできないその他の国——無条件に米国に追随する日本——は、いっそう愚かである（もちろん、個々人はどの国においても多様である）。

湾岸戦争で、アメリカ国内の9割が賛成し、あちこちの町に、愛国心及び兵士たちを全面的に支持していることを示すと同時に、無事に帰ってくることを願って黄色いリボンがつけられた。おぞましい。戦争に協力し、アメリカ人戦死者が少ないことで沸きかえる発想。自分たちの石油依存生活を顧みずに、アラブ諸国を石油確保のために自由に支配しようという露骨な意志。

途方もない戦費を調達するために、他国にも国連を通じて参加させた。湾岸戦争において国連とは、米国のことであった。日本は、おずおずと金だけを差し出すことで、最も「得点」の低い結果に終わった。世界に何のプラスの貢献もしなかった。全くの情報操作が行われ、アメリカ・マスコミは公平中立報道・脱統制・背景分析ができずに敗北した（死体の映像は映さないのが基本方針とされてしまった）。戦争ごっこと軍隊と、愛国心と、国と家族愛と宗教は一体化した。若者は、何も真実を知らないという意味でバカのまま戦場に送られ戦った。言葉の最も表面的な意味だけを鵜呑みにして。

そもそも、軍隊とは、いったんそこに入ったら、命を国家に捧げることを命令のもとに誓うものである。それ自体がおぞましい。私は絶対に軍隊に参加しない（徴兵制度のもとでも徴兵を拒否する立場）。事態に深く巻き込まれた末端の人間は、平気で「今回は道義上、イラクが悪くてアメリカが正しいことはなんの疑いもない」などと言う。「戦争になったら戦うのは隣にいる戦友のために戦うのだ」。戦争で死んでも、人は悲しみと反省を戦争自体に向けない。神に祈るだけ。実は戦争中は気分が高揚し、スポーツでタッチダウンしたときのような感情に包まれている。役割がはっきりし、一体感を持って、充実感がある。感動がある。センチメンタルがある。戦争映画がよく作られるのもそのことと関係している。そして、軍隊自体、戦争自体になんかの疑問

も持たず、「トップガン」や「愛と青春の旅立ち」で、トムクルーズなどの俳優がカッコよく楽しく兵士として生きている。

2001-2003年の時点で、ブッシュ米国大統領が怒りに任せて敵を叩こうとするとき、そこには疑問の余地のなさ——自分の正義や優しさに酔う姿勢——がにじみ出ており、彼が気持ちよく高揚しているのがみてとれた¹⁶⁾。マイケル・ムーアは、その著作〔2002〕や自身が監督・脚本・主演した映画「ボウリング・フォー・コロンバイン」(カナダ、2002年)で、ブッシュを先頭として世界の警察官気取りで戦争に邁進する今のアメリカがなぜそうなのかを浮き彫りにした。銃への鈍感な姿勢と多くのことでの単純さを背景に、他者への不信感、特に黒人などへの抑圧からの反撃にたいする無意識の恐怖を感じて暴力に走るアメリカの雰囲気まいしんが示された。アメリカは湾岸戦争時と変わっていない。

同じ頃の日本では、不況の不満とたるんだ日常に嫌気がさした気分が充満しており、北朝鮮への怒りと恐怖感(メディアに煽られたもの)が「はけ口」として用意され、緊張感のある戦争をやってみたいという空気が膨張しつつあった。北朝鮮や韓国や中国にいつまでへいこら頭下げてやってるんだとか、北朝鮮が核武装したらどうするんだとか戦時の準備があって当然とナショナリズム的言説が勢いよく語られ、その顔々は高潮していた。テレビや国会では、徐々に「北朝鮮が攻撃してきた」「力には軍事力で対抗するしかない」「予防的先制攻撃も選択肢のひとつだ」と真顔でいう人が増えてきた。

情報操作問題

戦争に関しては情報操作がなされていることは常識である¹⁷⁾。ベトナム戦争でメディアがリアルな悲惨さを伝えたために反戦運動が盛り上がったことを反省した米国指導層は、それ以降、戦争報道を規制し、情報操作によってメディア自体と世論を操作することに全力を傾けてきた。

16) 対テロ戦争においてアメリカは国際法の精神を踏みにじり、タリバーン兵などの捕虜を「戦争捕虜」扱いせず、「不法戦闘員」と呼び換えることで、ジュネーブ条約や国際人権規約、拷問禁止条約で決まっている戦争捕虜への一定の人権や処遇配慮をしなくてもよいとし、しかも国際的な公平な裁判でなく米国内の軍事特別法廷で裁くという。ジュネーブ条約では捕虜の資格に疑いがあるときには法廷で審査されるべきとしているが、審査どころかブッシュ政権は捕虜の身元も拘束理由も明らかにしないまま、一方的に拘束し劣悪な収容施設に閉じ込め取り調べている。すべては「テロとの戦い」の名のもと、なんでもアリというのである。

17) この米軍による情報操作については、2003年3月9日放送の「サンデープロジェクト」(ABCテレビ)よりまとめた。

米軍の83年のグレナダ侵攻、89年パナマ侵攻では、戦争の悲惨さを隠すために、「治安が不安定で危険」を理由に取材を強く制限し、軍が案内するところを共同取材させるだけの形態をとった。死体はすでに処理されたあとで、戦争の悲惨な実態を伝える映像はまったく撮れないようにコントロールされていた。軍の都合よいところだけを見せ、庶民による米軍歓迎の映像はプロパガンダで、広告代理店が米国旗を配り準備し演出したものであった。湾岸戦争でも攻撃はピンポイントで、民間人は死んでいないという宣伝がなされたが、もちろんそれは嘘であった。

湾岸戦争では、戦争開始反対の世論が多数派であるなかで、クウェートがイラクに侵攻されている悲惨さを伝えるために、クウェート人少女ナイラによる、「イラク兵によって赤ん坊が虐殺されるのをたくさんみた」という涙ながらの証言をでっち上げた。この証言を利用して議会ではイラク攻撃容認、戦争賛成派が逆転勝利した。だが戦争から1年後、実は彼女は駐米クウェート大使（王族）の娘で、証言は広告代理店による戦争賛成の世論をつくるためのキャンペーンの一環で、彼女に演技指導をして作り上げた物語であり、全くのプロパガンダであることが明らかにされた。キャンペーンの資金はクウェートから出ていた。未熟児の大量虐殺は嘘であったとあとで調査で示されたが、そのような声は湾岸戦争勝利の声にかき消された。

ボスニア問題でも広告代理店は、メディアにこの問題を取り上げさせるような隠れたキャンペーンを繰り返して成功した。「9・11」以降、国防省内には、情報操作のための機関が作られたことがすっぱ抜かれた。メディアも「9・11」以降、一時は愛国的報道一色に染まり、ブッシュ支持の世論形成に一役買った。

日本でも拉致問題、特に帰国した5人の動向に報道が集中し、しかも代表取材のために画一的な報道が席卷した。ちょっとでも異なる意見の者には「売国奴」という声が飛ぶなかで、メディアは萎縮した。

思い返せば、ペルーのフジモリ元大統領は、2003年3月現在、国際刑事警察機構（ICPO）から住民虐殺の容疑で国際手配されていたり、ペルー政府から大量殺人容疑で身柄引渡しを求められている存在であるが、96年に起きた日本公邸人質事件のとき、日本のメディアはフジモリ大統領を正義（日系人だからと特に肩を持った！なんとナショナリスティックか）、ゲリラを悪ときめつけ、武力突入によって無抵抗のゲリラメンバーを虐殺した可能性が高いことに無批判的であった。その結果日本の世論はフジモリ大統領賛美一色となった。ICPOから国際手配されている現在、日本政府は逮捕しない方針を打ち出し、マスコミはそのことに無批判である。メディアはどのような世論操作もできるのである。

2-2 戦争とは

戦争の実相

勢いのよい好戦論者の言葉とは裏腹に、戦争の実相は、悲惨である。日中15年戦争・元皇軍兵士の告白を記録した映画『リーベンクイズ（日本鬼子）』（2001年、日本、松井稔監督）¹⁸⁾ や『ゆきゆきて神軍』（1987年、日本、原一男監督）は、そのことを如実に物語る。帰還兵は妻や子どもたちや友人たちに真実を語ってこなかった。だが、略奪・強奪し、虐殺し、レイプし、リンチし、人体実験をし、慰安所通いをし、毒ガスを使用し、人肉を食ってきたのだ。「普通の人」がそれを行うようになるのが戦争であった。また『ライフ・イズ・ビューティフル』（1998年イタリア映画、ロベルト・ベニーロ監督、脚本、主演）でも、友人と思ったドイツ人軍医は、強制収容所でユダヤ人が殺される現実をみてもなぞなぞに熱中していた。『蝶の舌』（1999年スペイン映画、ホセ・ルイス・クエルダ監督）では、やさしい先生からたくさんのことを学んだ少年は、内戦の中、家族が生き残るためにその先生を「アカ」と罵り石を投げつける選択をしてしまう。

『セイヴィア』（1999年米国映画）は、敵軍にレイプされてできた「レイプベビー」を巡る悲劇や、大きな木槌で次々と無抵抗の人を殺すなどの壮絶な虐殺シーンによってセルビア人とクロアチア人の戦いのおぞましさを見せつけた。『ノーマンズランド』（2001年、仏・伊・英・ベルギー・スロヴェニア共同制作、ダニス・タノヴィッチ監督）では、戦争の理由もわからないまま争う者たちの絶望、戦争の無意味さが描かれた。心を通わせた瞬間があったのに、結局、戦争の枠組みの中、殺しあうしかないと前線の愚かな兵士たちは思い込まされる。

『戦場のピアニスト』（2002年、ポーランド、フランス合作、ロマン・ポランスキー監督）¹⁹⁾ では、ユダヤ人がゲットーに強制移住させられ、徐々にひどいことがまわ

18) これをみて、「こいつ等は中国共産党に洗脳された共産主義の手先だ」といって、戦争の真実に聞く耳をもとうとしない人は、〈たましい〉で聴いていない、観ていないということだと思おう。

19) この映画への批評で、主人公シュピルマンがレジスタンスに参加しないことに対して、「苛酷な状況下をひたすら逃げ回るみじめな姿を、だれが責められるだろうか。生き残れたのも偶然でしかない。しかも幸運をもたらした者の中には、裏切り者やナチス将校がいる。彼らも主人公と同じく戦争の犠牲者である。敵味方や行為の善悪を超えて、戦争という悲惨な現実が浮かび上がってくる」と書いている批評家があった（『日経新聞』2003年3月3日）。この「正論」的な批評に私は微妙な違和感を抱いた。映画は確かに無力な主人公の現実から描くことで、戦争の、ナチスの蛮行を浮き彫りにできた。ナチスだけが悪いという善悪二元論がダメなのは当然だ。これを、勇敢にレジスタンスしてすぐに死んでいる者の目を通して描こうとすれば、描けるものが少なかったであろうことは間違いない。だが、結果として実際に生き残った者がそれ

りに起こっていても、多くの人たちは——非ユダヤ人も、ユダヤ人自身も——「無関心」的「諦念」的態度を決め込んだ。隣で人が殴られても、陵辱されても、殺されても、多く人はわが身を守って生き延びるために、抵抗しなかった。ワッペンをつけさせられ、歩道を歩くことを禁止され、それでも多くは受け入れた（一部では集団的抵抗はあった）。

歴史をあとから見ればもっとはやくから抵抗したり逃げたりすべきであったことがわかる。だが、当時の多く人は、回りに起こること（他者の窮状）の本質的意味を考えることから目をそむけた。隣で倒れる人に心をそわすことをやめた。考えることをやめた。自分だけは何とかなるはずだと信じて。自分を守るためにはそれしかないと思って。そのうちきっとよくなるはずだ、何とかなる、そんなに悪いことが続くはずがないと思って。抵抗すれば殺されるだけだ、と思って。だが、人間とはそうしたものだと思う。今度日本で同じような状況になっても多数派は同じ行動をとるだろう。そのことが恐ろしい。レジスタンスする者は一部でしかなかった。そしてやすやすと皆が虐待され、殺されていった。ナチス軍人たちは、やすやすとひどいことを行った。ピアニストを助けた軍人として、多くの人を殺したのである。

ベトナム戦争で約5万8千人の米兵が死んだが、戦後、それよりずっと多い約15万人のベトナム帰還兵が、精神の破綻をきたしたり社会適応できなかつたりして自殺した²⁰⁾。水木しげる『昭和史①～⑧』[1994]が示すように、軍隊の中では人を刺さないと許されず、不条理ないじめやリンチが繰り返され、何かあるとビンタだった。1971年にスタンフォード大で遂行された心理実験の実話を基に作られたリバー・ヒルツェヴィゲル監督『e s』（2001年度ドイツ）は、人間がある状況におかれると「囚

ゆえに描けたという事実と、あとの時代の者（映画鑑賞者）が、現代においてこの映画に描かれた事実から何を学ぶべきか（主人公の生き方でよかったか）は、区別して考えられなければならない。簡単にナチス将校やナチス協力者を同じく「犠牲者」と言えるか。レジスタンスへの共感的思いが伝わらない文脈で、うろたえていた主人公をある種「擁護」することは、それは現代に生きる自分の無為への言い訳に聞こえる。この映画のメッセージは、主人公への同情ではなく、人の善い音楽家の「愚かさ」を自分の問題としてみつめることのみ、深く受信できると思った。私達の多くは、戦争がおこると、わが身を守るために、隣で人が殴り殺されても、何もできないような存在なのだ。戦前に非政治的な存在であったように、戦争がおこったあともなす術がなくうろたえる存在なのだ。瞬間的に何が大事かを判断し、命をかけるような行動がとれないような、準備のできていない存在なのだ。そのことを学んで、どのように生きようとするのか。対イラク戦争が開始されそうなときに、自分がこれから起こる戦争と自分の責任をリアルに捉えようとするか。この映画の意義はそこにある。「過去の物語」「戦争一般」に閉じ込めてピアノの音に酔っている場合ではない。

20) 星野 [1997] より

人」を支配虐待する快感に酔う「看守」に簡単になれることを示した。それは日本軍やドイツ・ナチスによる虐殺が特殊（な悪人によるもの）ではなく、誰もが行いうる行為であることを証明するものでもあった。

そして戦争責任は軍部幹部だけでなく、軍人一般、そしてそれを支える国民全体にあることも忘れてはならない。例えば満州事変は日本軍のでっち上げであったが、メディアは日本軍への激励キャンペーンを繰り返して、一般の人々は出動部隊の歓送迎や募金活動を行い、参拝や祈願を繰り返した。そうして戦争への道が整えられていった。

こうしたことをつなげ合わせて、戦争というものがどういうものを学ぶ必要がある。

人間は根源的に考えない

このように、戦争とは、熱狂であり、快感であり、感覚麻痺であり、虐待・虐殺であり、レイプであり、無関心と諦めと妥協と裏切りであり、戦争体制に反逆するものを抹殺するものである²¹⁾。とするなら、「反・戦争」しかない。私にとって、妥協の余地はない。どちらが正しいのかではない。戦争において真実は無数にある。「正義」を語らない戦争は、ない。だから私は私にとって「反・戦争」しかない、と確認する。

だが、ベトナム戦争の反省から根源的に立ち上がった疑問は、湾岸戦争でもアフガン戦争（反テロ戦争）、対イラク戦争でも、もはやアメリカになかった²²⁾。日本での有事法制や対北朝鮮への議論などを聞いていると、人を殺すリアルさ、殺される身体的精神的痛みのリアルさのカケラもない。人間の多くは、根源的に考えないのだ。簡単な、熱狂の論理、排除の論理、民族主義的感覚、軍事的論理に屈するのだ。戦争は、普通の今の自分たちの生活を守るためにあるということ、その意味で、戦争と生活（平和）は対立しないとおもっている。そういう哲学で洗脳されている。今の日本で

21) 2003年のイラク戦争開始前の議論で、多くの者が抽象的に、戦争を論じている。実際に人が殺されるということ（自分が殺されるとき痛み）のリアルさへの想像力が欠如したような空疎な言葉が飛びかっていた。それはすでに戦争加担状態である。

22) もちろん、そうでないまともな人もいる。イスラム系テロリストに2002年殺害された米国パール記者の妻メリアンヌさんの言葉。「テロリストは夫の魂までは奪うことはできなかった。」「報復は容易だろうが、テロをはびこらせた私たち自身の責任を率直に問い掛ける方が大事だ。」「生まれてくる子どもに、パパはテロをなくすために、報復ではなく、アイデンティティや共感、友情を求めたのだと語ってあげられる」と。まともだ。

マドンナはいち早く9・11への報復反対を唱え、映画俳優ショーン・ベンは2002年にイラクに行ったし、またアメリカのあるカレッジ女子バスケット選手は、2003年3月に、試合前の国家斉唱のとき、星条旗に背を向けた。チームメイトはそれを認めていた。反戦運動の昂揚も含めて、マドンナの声は米国でも2002年末以降にようやくではあるが大きくなった。

どんどん大きくなる論調はまさにこの論理だ。子どもや妻を愛することと、国家を愛することはつながっている。自分を国家に自己同一化する快感に酔いしれている。戦争中は、ある種、ストレスが少ない。やるべきことが決まっており、考えなくても命令どおりに動けばよく、敵を叩けば高揚がえられるから。平凡でありながら不明確で達成が少ない日常生活の方がストレスが大きい。民族主義・排外主義は単純な頭でも理解できる。単純だからこそ疑問をもたない。

湾岸戦争を巡る言葉、兵士に送る言葉のいまましさは、吐き気をもよおす。「感謝の気持ちを兵士たちに捧げたい。ありがとうといたい」、「我々の戦いの正当性を疑うものは、もはや世界に一人もいない」、「私は君たちを誇りに思っている。君たちは国の誇りだ。帰還の旅に神の御加護がありますように。神がアメリカを祝福されることを」、「殺人は良くないことだけど、とにかく戦ってジョブを終わりにして、早くホームに帰りたい」、「家族の方々にもお礼を申しあげたい。愛する人達を戦場に送りだし、別れ別れの苦難を耐えてくださってありがとう。私たちに力を与えてくれたのは皆さんの愛でした。皆さんの力を私たちは信じていました。アメリカの偉大なる人々である皆さんにお礼を言いたい」、(息子を戦争でなくした父)「息子は神のもとに戻ったのです」等々。2003年のイラク戦争でも米海兵隊狙撃手は言う。「この戦争にいろいろ批判があるのは知っている。だがおれたちは兵隊だ。飯を食って、銃を磨いて、敵を殺さないと家族に会えないんだ。やるべきことをやるのさ」と。

ナショナリストの勝利

このアメリカの経験に、いったい日本が対抗することができるだろうか。ほとんど絶望的だ。差別主義者・石原都知事²³⁾が人気あるんだから、日本がナショナリズムに

23) 「三国人」などの排外主義的言辞、女性蔑視発言等を繰り返している石原氏は確信犯な「極右」である。日本人拉致疑惑に対して「私が総理だったら北朝鮮と戦争してでも(被害者を)取り戻す」(『ニューズウィーク日本版』02年6月19日)といい、中国人の凶悪犯罪事件を受けて「こうした民族的DNAを表示するような犯罪が蔓延することでやがて日本社会全体の資質が変えられていく」(『産経新聞』01年5月8日)という彼は、典型的な世界の極右政党・主義者の発想そのものの存在である。02年11月10日のテレビでは、「北朝鮮が拉致被害の子どもを一人でも迫害したり、病氣と称して殺したりなんかしたら、そういう国と日本はどうどうと戦争したっていい」と発言。「日本が逆に居直られたとき、子どもたちを取り戻すために、積極的な手段をとっていかというのは、憲法の拘束もへちまもない。超法規的に行動を起こしたことで、(国民は)逆に政府を信頼する」と。

だが日本のマスコミも大衆もほとんど石原氏を「極右」と呼ばない。02年4月の調査では就任3年を終えた時点で都知事支持率は78%、不支持率は14%であった。2003年4月には、高い支持率で都知事に再選された。

覆われる日は近いようにおもう²⁴⁾。そしてアメリカがそうであったように、今のままでは既成宗教やマスコミの大多数はもちろんまったく無力であろう²⁵⁾。だからこそ、私は、明確にポストモダン段階に対応する、反ナショナリズムの〈スピ・シン主義〉を自分と周りの人々に対して唱える。

イスラエルで兵役拒否する若者たちがいる一方で、大多数のイスラエル国民は、シャロン政権を支持し、兵役拒否をする若者を非難している。メディアが操れば、多数派というものは簡単にナショナリストになるものだと思う²⁶⁾。「不審船」の乗員を殺した事——戦争状態になった事——に、なんの痛みも感じないような報道があり、またそれをなんの抵抗もなく受け入れる多くの人たち。ガイドライン法が通り、今度また有事法制が成立しても、やはり自民党政権は当面続くだろう。大橋巨泉さんの選択を積極的とみる人は少ない。2003年に行われる可能性の高い米国による対イラク戦

24) 日本のナショナリズムの動きは、政治再編における保守統合化、PKO協立法（1992年）、周辺事態法、通信傍受法、国旗・国歌法（1999年）、テロ対策特措法（2001年）および関連法改正、有事法制関連3法や、日本版歴史修正主義である「自由主義史観」派の動きなど、近年高まる一方である。「新しい歴史教科書をつくる会」の呼びかけ人、賛同人に多くの有名人・企業人が名を連ねたということは、自分をナショナリストと公然化することが恥ずかしくないという愚かしくもおぞましい時代の気運／気配の象徴である。

また、99年3月23、24日付けの新聞にのった「ニッポンをほめよう」というキャンペーンも、お笑い芸人「爆笑問題」や歌手、矢沢永吉をつかって、ソフトな口当たりでナショナリズムを煽ろうとする動きだった。これは60の有名企業が出資する「日本を元気にする」キャンペーン事務局によるもので、「日本はダメな国」といいながら、そのダメさを何ら考えることなく情緒的に、でも、「ほめようよ」、「自信なさすぎ」、「今の日本なんて、絶対戦争しそうにない」、「政府が悪い、やれ官僚が悪いというが、じゃあどうしたいかって誰も答えられないじゃないか」、「欠けているのは愛国心、あるいはプライド」、「まず自分の家族を守るんだって気持ちが、国を考えることにつながる」、「日本人は優秀、タイシタ国だよ、日本って」などとして、愛国心的な雰囲気をつくりだしている。

25) 2002年のフランス大統領選挙で、フランス主要紙であるリベラシオン紙が1面に（反ルペンで）「行進しよう」と、ルモンド紙が同じく1面で「ルペンにノンというフランス」と訴えた。当然である。だが『朝日新聞』記者は「メディアが中立報道の建前をかなぐり捨てた。」としか書けなかった。つまり、日本のメディアは、反ナチ、反ファシズムという価値を前に出すのがジャーナリズムの仕事だと思っていないのである。行政・教育においても、メディアにおいても、「中立・不偏不党・政治に不介入」という洗脳をされてしまっている。なさない。不勉強である。

26) 2002年ワールドカップでの、特に日本と韓国の「熱狂的応援」をみて、僕は改めて熱狂への敷居の低さを確認させられた。今、そのときだけ楽しもうという軽い気持ちであることはわかるが、国家共同体の名前を連呼するだけのその低レベルの熱狂は、情報操作されればどっちにでも行くような危うい「共同体への渴望」「熱狂への渴望」であった。

争に、日本はまたも協力するであろう²⁷⁾。過去なされたように、未来にもまた「でっち上げ事件」か何かを契機として、排外主義が吹き荒れることだろう。テポドン一発でなびいたように。

だから、有事法制の先には、より完璧な国家総動員体制と徴兵制があり、いつの日か、個人の人権・自由をもっともっと侵害するものがあるだろう。

だから私は思う。そのとき、そんな中でさえも、抵抗できる「個」を今から作っていくしかない、と。戦争やナショナリズムの「快樂」を上回る何らかの「快樂」や「価値」を作り上げていくしかない。イスラエル兵役拒否の若者のように、世界の情報と繋がり、自分の頭で考えて、牢屋に入ることさえも覚悟してしなやかに抵抗できる人、少数派になっても言いたいことを言える人、自分の自由の権利を守る「シングル単位人間」を、いまから生み出していくしかない。

2-3 戦争責任と謝罪

「謝罪」の意味

アジア諸国への侵略、従軍慰安婦問題について、日本が中国、韓国など各国・各人に謝罪すべきは当然である。それは表面的形式の問題ではなく、〈たましい〉の水準で謝ることができるか否かの問題である。たんなる「過去」のことをむしかえずのではなく、今、再び戦争への道が整いつつあり、諸問題²⁸⁾がある中で、自分は戦争、侵略、

27) 米国政府によると、対イラク攻撃の予算は626億ドルであるが、国連の計算ではエイズの予防・治療・ケアなど低・中収入国のエイズ問題のコントロールには100億ドルが必要と。日本は戦費戦後復興名目で米国にまたもや莫大な金を提供するだろう。ロニアレキサンダーさん言うように、日本政府も戦争よりもエイズ対策に金を使うべきである。

28) 日米ガイドライン見直し、後方支援法、日の丸・君が代強制、盗聴法、そして有事法制整備(3法案)、メディア規制関連法(個人情報保護法案、人権擁護法案)、テロ資金提供処罰法(カンパ処罰法)など。典型例として「女性国際戦犯法廷」のことを紹介しておこう。性奴隷制度(日本軍従軍慰安婦制度)が女性、ことに植民地の女性に対する犯罪であり、天皇にその犯罪責任があることを明らかにした「女性国際戦犯法廷」が、国際的な女性運動の成果として、2000年12月日本で開催された(最終判決は2001年12月にハーグで出された)。それは、半世紀ものあいだ放置された犯罪にメスを入れて、加害を明るみに出し、被害者救済の道をさぐる民衆法廷であった。犯罪者を裁く権限を付託された国家がその責任を果たしてこなかったために、主権者である庶民・民衆が裁くに至ったものである。これまでもそうした民主法廷などを通じて国際法が前進してきた経緯がある。ところが、世界(のメディア)が注目する中で、その画期的な意義を伝えるべき使命をもった日本のメディアは、右翼などの圧力を受けて/恐れて、ほとんどこの動きを黙殺し、またすさまじい自主規制を行った。

そして、NHKでは、この「法廷」を取り上げ天皇の戦争責任にも言及するETV 2001番組「シリーズ 戦争をどう裁くか」(2001年1月29日~2月1日放送)をつくったが、制作最終段

人権侵害、軍の性奴隷制、憲法9条改憲、有事法制準備、天皇制等について、どのような考えをもち、どうしようとしているのか、が問われている²⁹⁾。過去がどっちが悪かったと喧嘩することでも、謝って屈服する（屈辱を受け入れる）とか謝らせて優越感に浸るといふ問題でもない。今できること、これからどうするかが問われている。

今、戦争やナショナリズムを煽るような者たちを放置・無視するのではなく、そういうものと闘う、そういうものと違う生き方をしていくということが、「戦争責任と謝罪」の問題の核心だ³⁰⁾。私は、戦争にも人権侵害にも反対だ。だから、過去の侵略や非人道的なことを「反省する」。一方が他方を支配する植民地支配などサイテーと思う。それをしたことを批判する。過去の正当化などしない。過去を忘れようとしない。なかったことにしない。戦争加害者が制裁を受けていないことを放置しない。今生きている被害者の人権を回復することを、今すぐしなくてはいけない。これから起ころうとしている戦争に反対しなくてはならない。そういう責任がある。教科書問題等で、自虐的な歴史観は間違いだなどと愚かなことを言う保守主義者たちは、過去でなく、今、そしてこれから、またまた優越感競争をしようと主張しているのだ。彼らは、これから、戦争をしたい、相手国への予防的戦争、相手国の支配者の首の挿げ替えをしたいといっているのだ。

元従軍慰安婦のひとたちの声を聴いて、心で、その痛みを感じるか、否か。ナショ

階で、右翼ナショナリストである秦郁彦氏の元「慰安婦」に対する侮辱的コメントを挿入したり、「法廷」に対するアナウンサーの否定的なコメントを入れたり、「法廷」の意義を評価する米山リサさんのコメントを大幅に削るなどして「法廷」の適切な取り扱い自体をなくすなどの操作を行なった。これが日本の状況である。なお番組改ざんに関して、裁判（東京地裁）がおこなわれている。

また、同番組改変に関する、米山リサさんの権利侵害申し立てに対するBRC（放送と人権等権利に関する委員会）判断が03年3月に出された。その判断は、権利侵害は認めなかった（勧告にまで踏み込まず、また、「著作者人格権」の判断を避けている）ものの、今回の編集を「番組として不自然」で「不適切・行き過ぎ」、米山さんの発言趣旨を番組は歪めたと認めるといふ番組内容に踏みこんだ決定（放送倫理違反）であった。米山さんの主張が大幅に認められ、NHKにとっては厳しいものであった。

- 29) 三好達・前最高裁長官が、2001年末に、皇室を中心とした歴史・文化・伝統を守る大切さを説き、改憲を目指す団体である「日本会議」の新会長に就任した。政教分離が争われた愛媛玉ぐし料訴訟で、15人中、13人が違憲と判断した中で、三好氏は合憲と反対意見を述べた人物で、こういう「右翼・保守主義者」が最高裁長官に就任していたこと自体、そして前最高裁長官が「日本会議」会長になることが、今の日本の右傾化を映している。
- 30) 日本で、そういう姿勢で運動をし続けている人はたくさんいる。映画『リーベンクイズ』のものになった「中国帰還者連絡会（略称：中帰連）」や「女性・戦争・人権」学会はその一例である。対イラク戦争反対運動では、無数のグループが動いた。

ナリストでも右翼でも、まともな人間なら、元従軍慰安婦のひとたちの声が、ホンモノか、嘘か、金欲しさか、尊厳をかけた叫びか、わかるだろう。〈たましい〉の問題とはそういうことだ。日本優越の心なく、見下す心なく、他国の人たちと、まともな付き合いをする気があるか。「君が代を歌え、日の丸を掲げろ」と言われて、葛藤なく従順に従う先生に、何の〈スピリチュアリティ〉があるだろうか。何を生徒たちに伝えられるであろうか。

もちろん、「魂」という語を右翼が好むということからわかるように、戦争で仲間・家族が殺されたことを悲しむ気持ちにも、〈スピリチュアリティ〉的なものは関わる。だから2001年ニューヨーク・テロで、アメリカの人々が心を寄せて悲しむことの中にはスピリチュアルなきれいな気持ちのエネルギー（の側面）がある。だが、「自己」の拡張と多様性のバランスこそが、〈スピリチュアリティ〉の核心である。アメリカ人への気持ちをアフガンの人にもイラクの人々へも広げる想像力こそが、真の〈たましい〉である。自国民・同じ宗教信者だけにとどめる理由の一つもない。自国民（自分の宗教）を愛する気持ちを他民族（他宗教）への憎悪に変えることに、どんなスピリチュアルな理由も見当たらない。ナショナリストのいう「魂」に、その〈国境〉を超える翼を与えることこそ、〈スピ・シン主義〉的な営みである。

被抑圧側の共同体意識をどうみるか

また、「日本のナショナリズムを批判しつつ、中国や韓国の中にある民族主義的意識の側面を問題としないのか」という問いについては、秩序の下位には、カテゴリー重視に当面の正当性があることをまず対置する。つまり、侵略戦争を本当に反省するには、侵略戦争を肯定する秩序を揺るがす／否定することこそが必要であり、そのためにはその秩序の中で下位にある「被侵略国」においては、当面、民族や国家というカテゴリーを基礎に、上位に対して抗議する権利があり、それは既存秩序を揺るがすという1点において正当である。そして、その秩序の揺らぎの先には、国家や民族概念自体を消滅させていく（多様性概念を個人の差異の尊重にまで拡張していく）こと自体に目標の重点を移していくという2段階戦略の展望をもつことが必要である。

これは、男性優位・家族優位の社会において、女性や独身・離婚者・同性愛者等のマイノリティ・カテゴリー（その権利擁護）を重視しつつ、将来的にはその概念（グループ化）自体の消滅をめざすこと——それこそ真の多様性尊重——と同じである（拙著のシングル単位概念で強調してきたこと）。また、そもそも、韓国や中国の民族主義的側面を批判する者の立場と行動が問題である。たいていの場合、批判しているのは自虐史観などといって、自明でない「日本国家という共同体意識」に依存して

いるのではないか。これを「目くそが、鼻くそを笑う」という。

つまり、私は本稿で「ナショナリズム」を批判しているが、南北格差、先進国中心主義が支配する現在の状況の中で、いわゆる Anti-colonial Nationalism（周辺化されてきた人の反中心という帰属意識）と「ナショナリズム」の積極性は認めている³¹⁾。

これに関連して、加藤周一氏がまともなことをいっている（『朝日新聞』98年12月16日）。日本国が過去にアジア諸国民に与えた苦痛を、被害者の立場から見るとはこれまでほとんどなかった。日本は一度も本当に心から正式には謝っていない。「何度謝ればすむのか」というのは間違いだ。しかも、「昔のことは水に流そう」というのは、被害者が言うべき事であって、加害者に言うべき資格はない。昔のことだから原爆被害のことを忘れろといわれて納得する日本人がいるか。戦後生まれの人間には責任がないという意見もおかしい。歴史の遺産相続は都合のよい部分だけをとるわけにはいかないから、と。

もっともな意見である。レイプされた本人が、あるいは娘をレイプされた親がそのことを犯人から50年後に言われて「はいそうですか」と言えるかという視点がまず必要だ。それに加えて、私はそうした歴史から学びたいと思うのだ。人間の愚かさを。これからの生き方を。だからこそ、私の生き方（思想）の表明として「謝る」のだ。

31) 例えば、メキシコのザパチスタ、アオテアロア・ニュージーランドのマオリ、日本のアイヌ民族、沖縄、米国におけるネイティブ・アメリカンの例などがある。この点は友人の清水耕介さんから指摘していただいた。

なお、これに関連する点であるが、よくある誤解についても再度説明しておこう（詳しくは拙著 [2003b] 参照）。すなわち、「〈スピ・シン主義〉はいかなるコミュニティも批判的にとらえるのか、それとも「国家」等をベースとした特定のコミュニティのみなのか」という点である。

〈スピ・シン主義〉は、「つながり」の意義を強調しつつも、共同体の良さ、愛情の素晴らしさとの混同を避けるために、シングル単位段階を踏まえるべきことを指摘する。自他の区分がなくなる忘我的状況へ退行することと、〈スピ・シン主義〉段階の、深く自己を拡張する中で他者・全体と繋がることは、区別されなければならない。スピリチュアルな行動は、深く自尊心をもった個が集まってこそのものであって、先に集団があるのではない。多様性の概念で強調したように、あるグループ（共同体）をひとかたまりにみずに、さらにその中の差異を尊重する意義、あらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく意義を指摘する。

したがって、先の質問への解答は次のようになる。〈スピ・シン主義〉はいかなるコミュニティも批判的にとらえる。ただし、それは「アイヌ」「女性」「緑の政治活動家」といった特定グループのアイデンティティを全面否定するものではない。その「批判的」とは、共同体主義のマイナス面に敏感になり、シングル単位・多様性尊重を通過した上での特定コミュニティの尊重でなくてはならないということである。ある特定の大きな差別秩序を解体・変革する上で有効なコミュニティ・アイデンティティを尊重しつつ、さらにその中の多様性を尊重するということを主張するのである。

暴力（戦争）はこれまでもはびこってきたし、今後更に世界にそれがはびこるであろうが、その中で私の選ぶ価値観として、もう戦争するような生き方を止めたいというのだ。そのどこが自虐的なのだろうか。自己の尊厳意識に基づいた自立した姿勢である。

2-4 従軍慰安婦問題

「女性国際戦犯法廷」問題にも表れているように、従軍慰安婦問題で、あいかわらずこの日本は、ひどいことをやり続けている。スピリチュアルな人権感覚のなさが如実に現れている。「女性のためのアジア平和国民基金」³²⁾のなりふりかまわぬ行為は、誤りを誤りと認められない人達の、高慢さが出ている典型であった。

なぜ、「償う」といいながら、受け取りが拒否されることへの思いをはせずに、当事者が納得しないものを、押し付け続けたのか。一方で「もともと金が欲しかったんだろ」という声がある中で、なぜ札束で頬をたたくようなことをしたのか。被害者の中に対立と混乱を持ち込んだのか³³⁾。なぜ、国民基金解散と国家補償要求が出ているのに、それに耳をかさないのか（国家補償要求運動を続けること、日本の責任を問うことと国民基金路線の誤りを認めて国民基金解散を決めた上で、集まったお金を支給するのならまだわかるが、金を渡してそれで済まそうとするのは、なぜか）。韓国政府が98年4月に、日本民間基金の「償い金」を受け取らない方針を決め、その肩代わりをする生活支援金の支給を決めたことに、対立したのか³⁴⁾。

32) 日本軍の元従軍慰安婦の人たちに対し、国民の募金などをもとにした「償い金」（一人200万円）などを支給してきた組織で、95年、村山政権時代に発足した。その設立当初から、日本国内でも海外でも「基金は賠償責任の回避だ」とられ批判されてきた。日本政府が国家賠償は解決済みとしていたために考え出された組織であった。2002年5月に償い金支給が正式に打ち切られ、解散した。最終的に同基金の「償い金」を受け取ったのは、4カ国で約300人であった。

33) 元慰安婦で「償い金」を受け取った人のなかには、苦渋の選択として受け取った人もいる。そのひとりフリア・ポラスさんは声を震わせて言う。「私はずっと基金に怒ってきた。でも夫が心臓発作を起こし、入院治療と薬代でお金が必要だった。わたしにとってこれがどんなにつらい決断だったかわかりますか。」そして彼女は「お詫びの手紙」の受け取りは拒否した。「償い金」を人数で一番多く受けとった国であるフィリピンでも、元慰安婦の名誉は回復されていないという。02年5月に平壤で開かれた国際会議で、元慰安婦らアジアの戦争被害者たちは、「国民基金は慈善にすぎない」と批判を集中させ、日本への賠償請求で団結した。国民基金方式では問題は一つ解決されないことは明白である。『朝日新聞』02年5月15日等。
韓国政府は、「国民基金」によってカネの問題に矮小化されてことに反対して、加害国日本への責任を追及するために、「国民基金」に対抗して、国民募金で集まった金を含めて約4千万ウォン（360万円）を被害者に支給した。

34) 国民基金は、韓国において97年に7人の元慰安婦に償い金を秘密に支払ったが、受け取り拒否

それは、まず、〈たましい〉でものごとを捉えず、政治的振る舞いに陥っているからであり、基本的に自分が正しかったという立場にしがみついているから、つまりメンツにこだわっているからである。従軍慰安婦問題で運動している人々が国民基金を批判すると、「被害者の境遇と思いは複雑で、反対運動している人たちだけの立場が正しいわけではない」、「自分たちだけが正義を担っているという姿勢」と、東大の先生がまたまた新聞で「反論」してしまう³⁵⁾。黙って受け止めることができないという狭量は一体なんなのか。自分が批判されることに弱いエリートらしい姿勢である。理屈はいくらでもどこにでもつくことがわかっていない。いったん自分を守り出したら、永遠に自己肯定のためになりふりかまわなくなる。そのような力学に巻き込まれていることを外からみる目がないのである。

国民基金が、金をかけて新聞の一面全面広告しているその中身に本質が出ていた。今の日本の差別のポイントをつかかないような、どうでもいいような文言を並べる女性問題の捉え方が広告にはにじみ出ていた。少しの金を集めて「善意の金だ」などと書いているが、そうした主観的善意主義のレベルは、本質的な謝罪を避けて、金で黙らせようとする姿勢と事実上同じである。なぜなら、真に日本の侵略を認め、それを繰り返さない様にしようということを心から相手に伝えようとしていない姿勢であるという点で共通だからである。スピリチュアルではないのである。相手の〈たましい〉の叫びを聴く耳をもたない者が発する言葉、真心のこもっていない言葉は見抜かれる。

「女性のためのアジア平和国民基金」のなかで活動している人の中には元慰安婦の高齢化や日本政府の態度変更の困難さなど「現実主義」的な考えで、良心的にこれに協力している人がいることは明らかだ。だが、何ごとも、その意図だけでなく、実際の政治的意味あい（現実的影響）に責任を持たねばならない。2002年5月に「女性国際戦犯法廷」の法律顧問などが川口外相に日本政府の賠償などを求める判決文を手渡したときに、外相は「女性の尊厳を傷つけた問題についてはアジア女性基金で対応している」と官僚的対応をとった。つまりそのように、国の責任を免罪する方便として利用されているのである。保守派が従軍慰安婦問題に対してどういう立場をとっているのかを考えたとき、国民基金（基金内良心派）の「現実主義」は一体誰を喜ばすことになるのか。

〈スピ・シン主義〉の発想は、今の〈レイブ〉社会体質、つまり強奪、剥奪という権力的な態度の秩序と戦おうとしているのだ。それに反して国民基金に代表される日

キャンペーンが広がり、交付対象者のうち実際に受け取ったのは一部にとどまった。受け取り拒否が表明されても、2002年5月の解散まで、国民基金は方針の見直しをしなかった。

35) 『朝日新聞』紙上で、2002年8月から9月にかけて国民基金への賛否の意見が掲載された。

本の態度は再び〈レイプ〉している。なさない。

裁判所の姿勢もひどい。例えば98年4月27日に、日本で、従軍慰安婦制度は、女性差別、民族差別との判決がでた。国会は法的整備をする義務があるのに、賠償立法を怠っていると。しかし、30万円だけの慰謝料賠償だけの判決でもあった。公式謝罪も必要ないとの判断である。挺身隊についても排除している。おかしい。そこにくたましいは十分でない。

その他にも「元慰安婦」補償請求裁判はいくつも行われているが、特に2002年10月に出た台湾元「慰安婦」の1審判決は、「関連国際条約には賠償請求規定はない、民法の不法行為も20年以上経っているので請求権なし、原告たちの証言した歴史事実の判断もしない」というひどいものであった。

保守論客の上坂冬子氏は、98年判決に対して、日韓協定で解決済み、アジア女性基金を評価しろ、これでは日本が困ると、コメントでファシスト的発言を繰り返している。新聞記事（記者）は、もっとも肝心——対立点——な「国民基金の評価」をここでも避ける（日本の主要各新聞社はすべて基本的に国民基金支持であった。何と政治的センスがないことだろうか）。メディア（新聞）の責任は重い。

3 私の選択する価値

3-1 保守主義への向かい方

ナショナリズムの背景には、保守主義という思想体系がある。保守主義もひとつの価値観である。それは、社会における宗教と伝統と慣習を擁護し強調する。国家や民族を本質主義的に絶対視する。経験を重視する。家族や組織の秩序を尊重し、階層的な社会秩序を賛美する。平等原理を拒否し、能力差などを承認し、差別や不平等を肯定する。規律性や形式的・法的側面を重視する。国家や天皇制を神聖化し、国益を個人の権利の上に置き、公への従属を当然視する。宗教が文明社会の基礎とみる。日本の文化には、唯一無二の特性があり、他文化よりすぐれており、これは普遍的であるという文化本質主義、排他的国粋主義の立場をとる。多様性・多元主義を好まない。

それに対し、〈スピ・シン主義〉は、おおむね逆である。宗教や伝統や慣習を相対化し、それに囚われない新しい発想を擁護する。家族や組織や階層的な社会秩序に従属しない個人の自律性を尊重する。平等原理を尊重し、能力差の原因を問い、機会と結果の平等を目指す。社会的な差別や不平等を減らすための制度改革・意識改革をすすめる。規律性や形式的・法的側面も相対化し、柔軟に個人が決定していくことを尊重する。国家や天皇制の神聖化を批判し、個人が公へ従属しないことを求める。国民一

人一人の利益が集まっての国益であると考えてるので、国益を個人の権利の上に置かない。宗教の歴史的現実的意義を尊重しつつ、その限界も意識して、特定宗教からの自由、諸宗教の共存、無宗教の尊重をめざす。日本の文化が特に優れているという優越主義・排他的国粹主義を批判する。複数の価値観や社会集団や政治機構が拮抗し、競争したり共存したりする状態を望ましいとみる多元主義・多様性を好む。

どちらの考えも、選ぶ事のできる価値観である。国益に貢献するというのを、どのように捉えるか。大体今まではどの政府も戦争に反対する者に対して、「そのような行為は国益を害する、敵を利する」といつてきたものだが、それに対しては「真の国益とは何か」という対置もできるが、そもそも「国益」という言葉を好まないスタンスもあるのではないか、世界市民として〈国境〉を越えて発想する道もあるのではないか、と対応したい。国家・国民を一枚岩とみるのか、多様性と差異ある個の集合とみるのか。あなたはどちらをとるか。

私は、保守主義者、ナショナリストが存在しているということがわかる。「戦争は絶対悪だ」と考える人がいるのも一つの現実だが、理性的な立場にたちつつ戦争を肯定する論理があるのも現実だ。戦争を肯定するものが、皆、好戦主義者で、排外主義者であるというわけではない。戦争を肯定するものが、皆、「国家が敵国からの防衛のために先制攻撃したり報復することは当然だ」と決めつけるほど愚かな人々というわけではない。つまり、現実主義という名の対米追随肯定、軍備・戦争肯定論者があるということがわかる。

その上で私は思う。私と異なる発想の人たちだと思う。私の〈たましい〉は、保守主義・現実主義・軍備防衛主義に対し首を横に振る。〈スピ・シン主義〉は、今の保守主義・ナショナリズムの伸張に異議を唱える³⁶⁾。あなたの心は、どんな声を出しているのか。

36) 2002年秋以降の日朝問題に関する報道の偏りや論調の排外主義度は、戦前を思い出させる。新聞、週刊誌、月刊誌、TVは、こぞって北朝鮮を一方的に非難し、自国の側の問題には目を向けようとしない。帰国した拉致被害者自身の意思を尊重すべきと発言したものを「獅子身中の虫」と罵ることに典型のように、異論をはさむと「非国民」「敵国側の人間」扱いし、政府批判を許さないモノトーンの報道だけが繰り返された。「やっつけろ」「がたがたぬかすなら締め上げろ」「北朝鮮・人殺し国家」「悪魔の帝国」といったセンセーショナルなヤクザまがいの言葉が雑誌の見出しとなった。報道によって日本国民の怒りと憎悪が増幅され、それが在日韓国・朝鮮人への暴力となった。それは、歴史を歪曲し、戦争のできる国を目ざす動きと連動することになったが、メディアは情緒的報道を前面に押し出し、戦争準備に加担していることに自覚的になれなかった。メディアの敗北がまたもや明白となった。

3-2 〈日本〉への絶望を通過して

危機感をもてない国

「勇者の国、スコットランド。聞いてあきれれるね。スコットランドなんか、くそみたいな国だ。俺たちスコットランド人は、イギリス貴族のイボ痔に接吻する特権を争って、互いの首を絞めあってきた。俺たちの代表みたいな顔をして嘘ばかりならべる寄生虫みたいな政治家どもと、スーツを着ておべんちゃらをいう型にはまったファシストどもを、みんなまとめて死刑にしちまえ。」(アーヴィン・ウェルシュ [1996] 『トレイン・スポッティング』)

ウェルシュの「正しさ」に習うなら、日本もまた「糞みたいな国」である。一度として謝ったこともなくせに、「何回謝ればいいんだよー」と泣きわめく「ヒステリックなナショナリスト」がいる国である。リアルな戦争を知らずに空論を吐く若手がのさばってきた国である。「不寛容」を叫ぶ恐がりの国である。先の戦争における侵略について「謝罪・反省」するとは、相手(民族・国家)の奴隷になりたいとしっぽを振ることではない。「民族や国家/国益、天皇」という糞みたいなことを規準に、「戦争・侵略」という糞みたいなことをしてしまったことを心から反省し、「もう人殺しをしたくない」ってことをいうことにすぎない。それがわからないく日本という国は、一度死んだ方がいい。

暗黒化する日本

ル＝グウィン [1990] 『世界の合言葉は森』で、夢見る種族の世界が地球人によって侵略されていくように、日本でも暴力が勝利するだろう。すくなくとも当面は。典型的な手口は以下のようなものである。

ファシストやナショナリストは、日ごろから人々の不安に付け込み、外国/外国人や少数派や人権派(民主主義派)を非難し、愛国心を煽るような宣伝を繰り返すだろう。いかにも他国から攻撃がなされそうに煽り、それに力・軍事力で対抗することが平和や安全のために必要だと宣伝を繰り返すだろう。一国平和主義はエゴだと罵り、国際連帯の名のもとに軍事国家化をすすめるであろう。

そしてまず秘密のうちに軍隊的訓練を積んだ集団を養成し、彼らを中心に、民主派・反戦争派・反ナショナリストに対する挑発や暴行や虐殺が行われ、ファシストはそれを完全にやり遂げ、しかも秘密を守る(あるいは何らかのでっち上げ事件を作る)。すると、民主派・反戦争派・非暴力派・マイノリティ側による抵抗や抗議や反撃が、「反乱・暴動・非愛国的行動」に映る。ナショナリストは国家の危機だと煽り、断固

たる対抗措置が必要だとし、民主派の非愛国性を非難する。「多くの普通の人々」は、さらに民主派に反感をもつようになる。「反乱、暴動」を口実に、民主主義派・政治的左派も含めて、反ナショナリストに対する全体攻撃、壊滅攻撃に移る。そうした中で右派の政治的勝利を背景に、臨時的、戒厳令的狀態に移行し、軍事的警察的力を行使して、完全に反対派を制覇する。この時点でもう恐怖政治が完成していく。マスコミは徐々にこの流れを追認し、マスコミ内部の良心派は追放されていく。これがナショナリストの常套手口である。『世界の合言葉は森』は、そのことを示している。

これからの日本もこの種のシナリオを描こうとする者が出現し、ある程度それは成功していくだろう。対抗策は？ ほとんどないようにおもう。非暴力闘争は、暴力に負ける可能性が高い。民主・反戦争派にできることは、こうした奴等の手口を常に知らしめ、警戒させ、常に先手を打ってこちらから攻撃（言論による、ファシズム的動きへの対抗）し、彼らのたくらみを暴き、差別的行動、暴力、挑発を暴き、彼らを少数にとどめる情報合戦に勝つことであろう。そしてより本質的には、本稿で何度か言及するように、平時から、足元の民主主義運動、フェミニズム、エコロジー運動を各人の思想を強くしていく質、つまり〈スピリチュアリティ〉重視の質ですすめることであろう。非暴力的に〈逃げる〉闘い方を作り上げていくこと、思想的アートの闘争をすることであろう。

しかし運動側にその長期的視点は弱い。今のマスコミは思想的に弱い。ガイドライン（日米防衛協力のための指針）の論議でも、まったく長期的な視点も、庶民に対して語りかけるセンスもなかった。マスコミはこのままどんどん流されていくだろう。市民運動側、人権側の影響が勝つとか、マスコミが市民に積極的に反ナショナリズムの立場を伝えていくといったことにはならないだろう。

〈日本〉は沈没すればいい

世界資本主義の運動やグローバルな情報化の中で、世界的規模で進む「暗黒社会化」を止めることはほとんど不可能である。世界社会全体を平和安定的で無暴力にするのは無理だろう。世界を席卷するのは金と情報と暴力の力であり、資本主義の暴走と腐敗化は止めようがない。

そのような中で、日本社会は亡びていくだろう。腐敗していくと思う。それでも仕方ないとおもう。しかし、明治時代のインテリのような、無力感ニヒリズムからの逃避、観察者、オプローモフ主義になりたくない。私は、亡びの中での「亡び方」に、その中で生き残るべきものに関わりたい。例えばネットワーク、ある階層の人々。国は滅びる。しかし人々は滅びない。精神は豊かになっていくだろう。

以上の認識を踏まえて、私はいう。〈日本〉は死につつある。そして私は死ねばいいと思う（もちろん、これは「科学」的見解ではなく、私の“意欲”である）。経済危機だ、不況だ、円安／円高だ、史上最高の倒産件数だ、賃金カットだ、少年の犯罪だ、少女の売春だなどと今さら驚いたり騒ぐのは、鈍感である。そんなことは過去にもあったし、今もいつもあるのである。バブル経済崩壊以前にも、失業も、賃金カットも、首切りも、女性差別も、パート差別も、人事でのいやらしい競争も、上司へのおべっかも、会社内いじめへの負担も、暴力的買売春も、受験競争も、官僚の汚職も、官僚の尊大さも、教師の体罰も、学校内いじめも、家庭内暴力も、児童虐待もレイプもあったし、そしてそれらすべてを軽視する鈍感さもあった。世界で戦争は繰り返され、日本はアメリカに追随して戦争体制加担側に立ってきた。暴力と謀略がはびこり、「弱者」が泣き寝入りしてきた。国家権力や警察は汚い犯罪を積み重ねてきた。そんな「〈日本〉というシステム」は死ねばいい。それしか道はない。今更あたふたしてどーするとおもう。

「無責任だ」という人がいることは承知の上だ。システムが崩壊して結局困るのは、上層階級ではなく、多くの下層庶民の生活じゃないかという批判もあるだろう。古い左翼の「窮乏化革命論」と同じ無責任発想だという批判もあるだろう。だが、私のスタンスは、いまだに「政治は妥協だ」などと同じことを繰り返して時間を無為に過ごし、結局何も残さないまま年老いていき、システム維持（保守擁護）の一部と化すのは嫌だというものである。これが人類史上初めての挑戦（最初の世代の試み）なら、あきらめずにくつこつと既存手続きの上だけでの政治的努力を積み重ねようなどという考えも「あり」だろう。しかし、もう、先人の試みはみてきた。私が生きてきたこの40年でさえ答えは出ている。

〈日本〉の本質は、危機感と戦略を持ってないところにあるとは、以上のことを指している。だから私は判断した。次の世代にそれを伝える。私は「〈日本〉というシステム」の崩壊を望む。そして私はあらゆる〈国境〉を超えてネットワークで生き残ると。これが私の「リアル」だ。〈スピ・シン主義〉はそのスタンスで考えられている。今の日本・日本人（総体）は駄目である。歴史的に信頼できる政府を持っていなかったために、そしてひどい社会経済システム、ひどい教育のために、日本人の心が荒廃している。これが現状である。したがって当面、〈日本〉がよくなるはずがないということをはっきりと覚悟する必要がある。

アナキストたちのネットワークで生き残る

そのなかで何をするか、何ができるかというような問題の立て方の方がすっきりす

る。それはすぐ「政治や権力」の話にいくことではなく、足元から信頼できるものを作っていくことだと思う。すぐに日本や世界を「救える」はずがない。「今までのやり方でも努力すれば世の中は変わるかもしれない」というような観念論は、挫折の温床だ。そうではなく、「今までの枠組みでは世界を救えない」というニヒリズムから出発して、自分（たち）のサバイバルを考えるのだ。そのための友人、家族、地域、職場での、ころある者たちの支えあいである。お人好しになろうというのでなく、〈日本〉なんか死ねばいいということで、「否定」の上に、あらゆる〈国境〉を越える私たちがサバイバルするためのネットワークというビジョンを持つとうとするものだ。私には、国家や民族や今の企業群の存続でなく、スピリチュアル度の高い人たちのサバイバル、〈たましい〉のレベルの再生と飛躍が大切なのである³⁷⁾。

庶民が犠牲になるというなら、今もすでに犠牲になっているし、その庶民がまた加害者にもなっていると答えよう。私がいくら日本崩壊といっても、日本が沈没するわけではないという「リアリティ」を対置したい。むしろ、いまから志あるものたちが創造的個人となり、ネットワークを作りサバイバルすることにこそ希望があると言ってみてみたい。それを実践したいと思う。それが新しい社会の“雛形（基本）”^{ひながた}を作っていくのだ。社会システムとしての実際は、連続的な変化しかないだろう。だからこそ、自立した個々人（シングル）たちのネットワークこそ、「私たちにできること」として、強調すべきなのだ。何も皆が総理大臣や経団連会長の視点で発言する必要はない。自分の立場から自分にできることをする。それが私の「リアル」である。

そうした世界観の上でこそ、〈スピリチュアリティ〉を大事にするシステムとして、「社会的共通資本」概念を踏まえて地球環境と動植物生態系を守る循環型経済（持続可能な経済）にしていくこと、人権擁護社会にすること、ジェンダー分業と長時間労働を見直し、再生産労働をちゃんと組み込むシングル単位社会にしなければならないこと、情報公開と地方分権の流れの中で市民運動で市民サイドの条例、法案をつくっていくこと、NPO活動を社会的に拡大していくこと、そうしたことの展望があることを述べるができる。ニヒリズムの上での「〈日本〉破壊戦略」につながるネットワークといった文脈のものであるときにだけ、政治参加や議員数拡大、交渉、法律改正運動、裁判闘争などにも意味がある。それでこそ「家族のような身近な人たちと

37) 拙著 [2003b] 参照。なお、こうした意味で、灰谷・水上両氏の次のような感覚に私は近いものをもっている。国のことや、戦争のことや、あまり大きなことを語るまい。虫の命や、小さな子どもたちのことでいい、八月大名のような話を作っていきたい。国家や政治や、教育や、と大きな手振り人間をひとくくりにして語ってみせるあのやり方には馴染めない。水上勉・灰谷健次郎 [1990] 161, 172ページ。

の親密な関係」も新しく作れるということができる。私のニヒリズム／アナーキズムには、希望がある。

今の日本を覆っている「殺伐とした空気」を、クールでエッジな高い精神の生き方で吹き飛ばそうというような、根本的な提起をして元気になろうとしたいのだ。快樂の高い水準としての〈スピリチュアリティ〉、若者にその〈スピリチュアリティ〉感覚のすばらしさをつたえるものとしての、〈スピ・シン主義〉である（非禁欲主義）。

子どもたちを取り巻く環境自体が、一元化された情報と価値、汚い大人たち（近代オヤジたち）の存在の中で、競争ばかりで、身体性を奪われ、時間と人ところと身体がバラバラになるようなものとなっている。そんな中で何ひとつリアルなものと同じ向き合わない子どもとなっている。それが学級崩壊や、ナイフ、援助交際、チーマー、キレル子どもたち、透明な存在、疲れる子どもという形で現れている。もっと言うと大人もリアルなものと同じ向き合わず子どもにもそれを教えない、だから皆が殺伐とした心持ちとなって死につつあるという社会が日本だ。幻想の多様性を踏まえた上で、〈スピリチュアリティ〉を自覚し伝えること（各人がアナーキズムになること、その上での選択としての〈スピリチュアリティ〉といった価値に至ること）にしか道は残っていない。ラジカル（根源的）に、「近代化社会の後（ポストモダン）において、リアルであることとはどういうことなのか」を伝えるしかない。

3-3 「現実主義」ではない、私の選択——逃げる非武装・非暴力主義

「現実主義」が唯一の現実的な選択（正解）ではない

きな臭くなってきた時代の論争では「現実主義」が勝ちやすい。理想や希望をいうと、ナイーブだと嘲笑される。「イラクが本当に大量破壊兵器を隠しもっていたなら誰が責任をとるんだ」という脅しの発想が幅を利かす。「国益」「国防」「安全保障」という恐ろしくも単純な言葉が闊歩する。殴られたら、侵略されたらどうするという言い方・迫り方を皆がつばを飛ばして自信マンマンにいう。大衆の戦争反対論はイモーションだ、戦争は必要悪だ、日本の安全に戦争は必要だ、米国側に立つのが合理的だと、得意そうに語る輩（特に若手政治家さんたち）がいる。コメントする学者さんも賢そうにそのようなことを語っておられる。あーあ。あなたたちは庶民と違ってエライのね。多くの人は歴史から学ばないものだ。

現実主義者たちは、言う。独裁者に対しては力を緩めるとダメで、圧力のみが平和・改善をもたらす。それが現実なのだ。北朝鮮問題を念頭に、米国に恩を売っておかないと守ってもらえないから、対米従属支持しかない。戦争反対といっても日本政府は変わらないのだから、それではだめだ。戦争反対などというのは敵を利するだけだ。

少し理性的な人たちも、現実主義の立場が大事とばかりに、戦争に勝ってもその後、パレスチナの抵抗のようなことが起こる率も高く、アメリカ占領が上手くいくとは限らない、そのプラスとマイナスをみておかねばならず、アメリカが路線変更したとき、対米追随の日本は国際的に孤立する可能性が高いという意味で、とてもリスクだ。そのように日本がアメリカに追随すると国益上、マイナスとプラスがあるのに、政治家はリスクを説明しておらず、日本に対するテロの危険性も言っていない。北朝鮮問題を解決するとき、軍事的緊張をたかめていくのか、周りの国と協力して政策で変えていくのか。後者の道もあることを忘れるべきでない。そのようなことをいう。

現実主義の議論は大事だろう。政治では現実をめぐって議論しなければならない局面も多いだろう。戦争が絶対悪だという考えがあってもいいが、だからといって戦争を語ることを最初から排除しても始まらない。法や国際組織や倫理に基づいて限定的に戦争を肯定しコントロール度を高めようとする論理は必要である³⁸⁾。そのとき、理性的で説得的な現実主義的アプローチを支持したいと思う。

それを確認した上で言いたいのは、それでも現実主義が唯一の対応ではないということである。「現実的には……」ということ、思考の枠組み自体がとても狭くなっていることがある。袋小路から抜け抜け出ることができなくなるときがある。

たとえば、2000年9月にエルサレムにあるイスラム教の聖地「神殿の丘」をシャロン首相が挑発的に訪問したことを契機として、パレスチナとイスラエル双方のテロ報復戦争が激化し、現在まで続いている。2001年9月の米国への同時多発テロを口実に、イスラエル・シャロン首相は、国民向けテレビ演説で、「テロによる戦争がわれわれに向けられている。(パレスチナへの報復攻撃は)テロとの闘いであり、イスラエルと米国はともにある」といい、その後選挙でも再選を果たしている。自分のやっていることを棚に上げて、相手をテロだと罵り、自分たちの行動を「自衛・報復だ」といって正当化する。現実主義に立っても、いやそこに立つからこそ出口は見えない。双方が自分たちのほうこそ被害者であり抵抗したり報復する権利があるということではできる。両陣営とも自分たちを正当化するどんな理屈でもつけられる。それほど、もう事態は絡みあっている。現実的に考えれば必ず答えがあるというものではない。

それに対する私の意見

ではどうするか。どう考えるか。私は、自分の立場を語りたいと思う。

38) 先制攻撃が国連憲章や国際法違反であるという論理は全く正当で、説得力がある、と私は思う。ただ、現実政治は、論理だけでは動かないし、しかも別の「論理」は、正義の戦争を正当化するであろう。

まず、現実の政治力学が現実の様相を変えると、イラク攻撃に対する米英と欧州の分裂は重要な意義があることにみられるように、国連という場は大事ではあるが、国連を絶対的に信奉していればことが解決するというようなものではない。国際政治と官僚主義の「現実主義」のなかに国連も存在しており、国益のせめぎあいの場という側面があり、湾岸戦争における米軍主導実体を忘れてはダメである。映画「ノーマンズランド」を忘れてはいけない。

つまり反戦派が絶対的に拠って立てる磐石のものなどない。その上で、私個人はある種の価値を選ぶ。それは、現実主義の立場を離れて、自分は戦争に参加したくないというおもいを徹底する立場である。それは、国家の自衛・防衛などということ自体を放棄する「非武装・非暴力主義」の考えである。それに対しては、「もし侵略・攻撃されてきたらどうするのだ」とすぐに質問がくるだろう。「自衛のための戦争を言わないのは臆病だ」、「空理空論だ」、「逃げだ」、「不まじめだ」、「無責任だ」、と。それに対しては、「逃げる」ということをキーワードに答えたいと思う。説明しよう。

発想は、非暴力・無抵抗主義である。本稿に書いてきたように戦争のリアリティを捉えて、〈スピリチュアリティ〉を基準にする限り、私は「逃げる」しかない。戦わない。殺し合いをしない。そのために勇ましくならない。戦争の準備をしない。軍備拡大・軍事化しない。非武装・中立でいく。戦争が起こる前にできるだけ平和的手段でそうならないように手を尽くすことはもちろんである。だがそれでももし攻撃を受けたら？ 負けるしかないじゃないかと思うのが私の立場だ。

個人で考えればいい。道端で屈強な体格で武装した数人の男たちに取り囲まれ、抵抗しても殺されるだけだとわかったとき、とりあえずいいなりになるか逃げるしかないだろう。情けなくともそれしかない。同じぐらいの体力の相手でも私は逃げることを選ぶだろう。

ここで少し「逃げる」ということについて、考察しておきたい。

「逃げる」ということ

〈スピ・シン主義〉では、「病気」「障害」「失敗」「敗北」「喪失体験」「人の手を借りること」「ケアする活動」「スロー」などというもの——現代日本において一言でいって「弱さ」——こそが大事という価値観に思い至った。「弱さ」の豊かさを再発見する考えであった。

暴力は現実にはまわりに満ち溢れているが、だからこそ暴力を回避できるスキルを身につけたい、少なくとも加害者になることを減らそうと決意する考えである。「意気地なし」とか、「自分でなんとかしろ」というようなけんか腰でこられたとき、対

抗して言い返すのではなく、「意気地がないねえ」とか「一人でできないし助けてよ」とか「そうだねー、どうしたらいいものかねえ」とかいうように、闘わない姿勢である。

一方、シングル単位論が特にそうであったように、〈スピリチュアル・シングル主義〉は、「自由」や「きれいな心（高い精神水準）」「自分の権利や快楽」を実現するために「現実不正なるもの、自分を抑圧するものと闘うこと」を強調する。では、「闘う」ということと、暴力や「弱さ」とはどのように関わるのか。暴力を肯定するのか。あるいは暴力に対して「きれいな心」で勝利できるというほどの「甘チャンの単なる空論」なのか。自由な生き方ということと暴力はどのように関わるのか。この問題をここでは、「アオサギの眼」（ル＝グウィン [1990b]）の豊かさに依拠しながら考察しておきたい。

相手の土俵に乗らない、逃げる闘い方

まず、暴力を批判するのが〈スピ・シン主義〉の原則である³⁹⁾。暴力化する社会の中で、敗北／従属でなく、人間の誇りを基礎に「闘うこと」を重視するが、それは常にただ真正面からぶつかればよいなどとする論ではない。聞く耳を持たない人間はいる。暴力礼賛主義者、ファシスト、ナショナリスト、女性差別主義者、狂信的排他主義者はいる。そういう者に、心をこめて努力さえすればいつもこちらの言葉が届く、気持ち伝わると思うのは、非現実的で過剰にナイーブで、ナンセンスである⁴⁰⁾。

そのような輩とぶつからざるを得ないとき（はじめは言論で交渉しようとしても、駄目とわかったとき）、いつまでもこちらの希望にすがって楽観的に無防備に自分たちを危険に晒すべきではない。かといって、武器を持って暴力で勝利を得ることは基

39) 女性差別と暴力の本質的關係については、深い検討がフェミニストたちによってすすめられつつある。アリス・ウォーカー [1995]『喜びの秘密』も、世界の女性抑圧の根っこにある性器切除と奴隷化の関連性について深い検討を加えた労作の一つである。性器切除を中心あるいは典型として、男による女の支配、結婚やセックスにおける暴力という本質が描き出される。それは、おぞましい「事実」から目をそむけることを拒否する姿勢に貫かれている。私たちは、現在も全世界において、暴力の中にいる。アリス・ウォーカー [1995] 168-170ページ等。

40) 「アオサギの眼」の中で、ハーマン・マクミランに対する、ラズの評価は次のようである。「彼の魂は、小指の先ほどもありません。恐ろしい人です。私は恐い。彼は他人を傷付けるのが好きなんです。あなたがたは、お互いどおしで話すのと同じつもりで彼に話しかけてはいけません。彼には聞く耳はない。自分のことだけでいっぱいの人なのです。そういう男が相手では、ぶん殴るか、逃げ出すしかありません。だから私は逃げ出したのです。」ル＝グウィン [1990b] 297ページ。

本的に無理である。それは相手の思うつぼであり、相手の最も得意な土俵だからである。相手の得意な領域で闘うのは愚かである。相手の不得意な領域で闘うことこそ、真の勝利につながる。

したがって、相手の暴力的土俵に巻き込まれずに〈逃げること〉あるいは〈離れること〉が正解である。「自由」は〈逃げる／離れる〉というような、一見「弱い」ところにあると、〈スピ・シン主義〉は考えるものである。そこで「威厳や勇氣」という「強さ」にこだわって暴力で闘うことこそ、自分を不自由に追い込んでいく。そこで「犠牲が必要」なのではない。「勝利のための犠牲」などという発想は、生け贄の発想と同じであり、無展望な自己陶醉に過ぎない。どんなときにも「犠牲」は必要ではない。

非暴力主義

これは、キング牧師やガンジーの経験も含むところの、「非暴力闘争」の歴史から学んだ知恵である。闘い方は4段階に分かれる。まず交渉であり、次は、非協力である。挑発に乗らず、暴力的抵抗をせずに、腰を据えて、動かないでいる。本気だということを示す。逮捕されるなら逮捕されるがままになる。高齢者や女性や子どもも参加できる闘い方である。第3段階は、最後通告、最終的抗議である。建設的な解決方法を申し出る。それに同意を得られない場合、こちらがどうするかを言う。第4段階は、市民としての反抗である。命令、法律、権威が発するものに服従することを拒否する。自分たちだけの独自の権威を打ち立て、独自の道を歩むのである。これが、威嚇、拷問、投獄、攻撃にもかかわらず歴史から得られた有効な闘争方法である⁴¹⁾。

ここには、暴力は、強さではなく（悪い意味の）弱さの現われであるという哲学がある。「真に人を納得させないものは、（本当の意味での）力ではないこと」を知っている考え方である。「暴力は弱者の行動であり、真実をしっかりと握っていれば、魂は力を得ることもわかっていた」⁴²⁾。だが、このことを理解することは、難しい。ことに力を過信している男性には難しい⁴³⁾。〈スピリチュアリティ〉とか人間の尊厳ということを理解することが難しいのと、それは同じである。目に見えないものは、わかろうとしないものにはわからないのだ。だから、非暴力主義は、たんなる理想論にとられやすい。ただの平和主義者の戦術や願望ととられやすい⁴⁴⁾。状況との関係が本質

41) ル＝グウィン [1990b] 「アオサギの眼」 304ページ。

42) ル＝グウィン [1990b] 「アオサギの眼」 238ページ。

43) ル＝グウィン [1990a] 『世界の合言葉は森』 にでてくるデイビッドソンは自覚している。男は、女を犯すときと男を殺すときに、真の男になると。

的に重要なのであるが、人は単純化や定式化を好むので、暴力に正当性を与える「理論」があると、人は安易にそれに飛びつく。「安易」ということの危険性に気づくには、“少々”の理性と経験がいるのである。

自由・平和・勝利の本質的な意味

暴力の魅力は、怒りという強いエネルギーに直接結びついているからではないだろうか。怒りは、立場に規定された身体的な感情であり、それゆえ、それ自体を否定すべきものではない。とすれば、それを暴力という形で発散させることは正当なことのように思える。少なくとも、相手が明らかに理不尽で容赦のない残虐な暴力をふるってきたときには。

だが、自由や平和や勝利ということの本質的な意味を考えなくてはならない。真の勝利は、味方の血（犠牲）に怒りの勇気を得、相手の血をみて雄たけびをあげることではない。相手も含めて、皆が（社会を構成するものという本質的な意味の「皆」）、暴力の愚かさを学び、心から民主主義的な思考をできる人間になること（社会システムが非暴力的になること）である。そのためには、「闘い」を通じて、味方も敵も成長するものでなくてはならない。だから、死者も負傷者もできるだけ少なくして、かつ、相手がなぜ力による支配に失敗したかを皆が学ぶものでなくてはならない。それこそが、私たちの自由のために必要なことなのである。

もちろんこれは、原則でしかない。非暴力主義だけで、いつも万能というわけではない。むしろ、多くの場合は、非暴力主義は短期的には敗北する運命にある。それでも、私（たち）には、広義の意味で非暴力主義しかない。自由や民主主義を求める限りは。それが、〈スピリチュアル・シングル主義〉の覚悟である。この原則の上のみ、状況に応じた具体的戦術がある。

だが、〈スピ・シン主義〉は、禁欲主義、「犠牲」の発想でもないと言った。負けることがわかっている勝負をしろというのは、まさに犠牲主義、禁欲主義的ではないか。だから、正確にことは伝えなくてはならない。注意深く私の記述を見てほしい。負けることがわかっているときに負ける勝負をしろとはいっていない。殺されたりおめお

44) 「非暴力主義」の現実を少しでも学べば、それがいかに勇気のいる行動か、自分には簡単には真似できないことがわかる。その志の高さに震撼するであろう。武力をもって戦う方が簡単である。撲られても脅されても、抵抗しない。その姿を何度もみて、ようやく多くの人はその運動のめざすものと正当性を理解する。〈たましい〉を、その真実を理解する。誰が敵で、何が悪かを理解する。それは時間がかかるが、本物の理解であり強さである。本当に気絶するまで撲られたり、家に爆弾を仕掛けられたり、逮捕・投獄された人たちの「無抵抗・非暴力」には、真の勇気がある。

めと虐殺されろというのではない。相手の暴力にさらされつづけろというのではない。「相手の暴力的土俵に巻き込まれずに〈逃げること〉」が大切と述べているのだ。これはなかなか深いところをついた、使い勝手のよい〈真理〉ではないだろうか。

多くの場合、勇気があり理想に燃えているものは、「逃げる」ことをよしとしない。「逃げ出して森に隠れることは……人間のすることではない。立ち上がって、考え、理想を持つことこそ、人間のすることだ。そして理想のためにがんばること。みんなで力を合わせて、だ。」と。だが、ラズはいう。「逃げ出すですって！ あなたは南の谷にマルケスが仕掛けた罠にすすんでかかり、それを称してがんばりとおすことと呼ぶつもりなの！ 選択と自由について演説しておきながら——この世界、全世界のどこにでも好きな場所に住み、自由になれるというときに、それが逃げ出すですって！ 何からの逃避だというの？ 何に向かったの？ もしかしたら、私たちは決して自由にはなれなくて、人間はいつでも自分を引きずって歩くものかもしれない。だけども少なくともやってみることはできるでしょう？ あなたたちのロング・マーチは何のためだったの？ それは終わってしまったとあなたは考えるの？」⁴⁵⁾

誤解がないようにあえて確認しておくが、上記した「逃げることをよしとしない、勇気があり理想に燃えているもの」とは、ナショナリストのことだけではなく、左翼や活動家や政治家も含む多くの者たち、マッチョな人たちみんなのことである。

その上で言う。私は〈逃げる〉というような闘い方をしたいとおもう。ここで、〈逃げる〉相手は誰を意味するのであろうか？ それは、もちろん、ナショナリスト（敵）からだけではなく、「暴力的土俵での戦い」自体から〈逃げる〉ということである。それは「弱くなる＝反マッチョになる」ということである。同じ土俵に立つのでなく、スピリチュアルなところに存在することこそが、敵にわからない闘い方（非暴力闘争）である。

「弱さ」の積極性を本当に理解するには、人間的成熟のバランスが必要だ。狭い受験的・能力主義的能力でなく、体と心で総合的に捉える能力が必要だ。「逃げる」と

45) 武力と権力を持つシティーに支配される状況にたいして、ラズが提起する言葉。ル＝グウィン [1990b] 356－8 ページ。ラズは別のところでも、「闘うしかない」「自由は犠牲によって勝ち取られるのよ」との言葉に対して同じ発想の反論を繰り返す。「行ってしまえばいいのに。抜け出して、そして自由になれるのに。……私は何かの理想のために犠牲になったりしなかったわ。ただ逃げてきただけよ——わからないの？ あなたたちのすべきことはまさにそれなのよ！」ル＝グウィン [1990b] 309－314 ページ。

いう従来の言葉のニュアンスから、ただ楽な方に逃げると理解してはならない。「自分の自尊心を放り出して尻尾を巻き、強いものに従属し、媚を売る」というのではなく、むしろ、戦略的に本当に「勝つ」ための、自分の自尊心を守るための闘い方としての「逃げ」である。長期的戦いのためには、バカな戦いから離れる勇気をもつという戦略。

悪い意味の逃亡でなく、「本当の大きな戦い」のために戦いの位相・水準をずらす、相手に想像もつかない「場所の転換」の戦略である。相手の土俵に乗らないような、相手の目には見えないけれども、私たちの目にはとても大事なものとして見えるような土俵で、つまり〈スピリチュアリティ〉の土俵で闘いたいと思う。想像力と勇気をもって、闘いたいとおもう。

それは、文化の運動、思想の運動、アートの運動であり、心（精神）の運動であり、個人のスタイルの運動である。きれいごとというよりは、したたかなスタイルで、しかし、やはり、自分にとって、勇気が体の芯から湧いてくるような闘い方——それはまさしく闘いである——で、立ち向かっていきたいと思う。

〈逃げる〉という原則を実際にどのように適応するかはその状況次第である（現実的ではなくてはならないからこそ、ときには外国に逃げ出すことも十分考えなくてはならない。逃げ遅れたユダヤ人が虐殺されたことを忘れるべきでない）。しかし、この「逃げる」基本原則は、負けるのではなく、かといって相手の暴力的土俵にまき込まれないためには大切な発想である。大切にしたい。

自己憐憫でなく具体的にたちむかう

自分を惨めだ、かわいそうだと自己憐憫する人がいる。これは、〈スピ・シン主義〉でいう「弱き者」とは似て非なるものである。自己憐憫の人は、惨めという状態にたんでき耽溺している。不平を言ってばかりで、自分のことばかり考えている。自分の置かれている状況に対して誰かを非難する。なぜ自分の人生がうまくいかないか、楽しむ能力が少ないかを分析せず、人をうらやみ、自分の不幸を嘆き、人の同情をかおうとする（私はこんなにつらい、不幸だからどうにもできない）。これは実は、相手に対して無意識のうちに強迫を行い、相手をコントロールしようとしていることである。中毒であり、一種の病気である⁴⁶⁾。

〈スピ・シン主義〉の「逃げる」論は、そうした相手を支配するような消極主義を擁護するものではない。人の弱さも悪も認めるが、またその弱さを抱えた人間が強く

46) 「共依存」概念が明らかにしたこと。加藤諦三 [1993] も。

もなれるという希望をもって、その姿勢を前向きに変えようという志向である。きれいごとを述べてばかりいたり、現実を嘆いてばかりいるのではなく、現実の闇を見つめつつそれと具体的に「闘う」ような勇気を称えるものである。その勇気を支えてくれるような世界観が〈スピリチュアリティ〉である。

闇を認めることと悪と闘うこと

〈スピ・シン主義〉というのはきれいな優しい心をもって善く生きたいということだ。だが、こっちが優しくなればすべてうまくいくというような時代ではない。職場や学校のいじめ問題のように、闘うしかないという面がある。「邪悪な者がこの世を支配するには、良識のある者が何もしないというのが最も有効な手段である」や「地獄へのみちは善意で敷きつめられている」という言葉もある。悪い奴等とは闘わなければならない⁴⁷⁾。許さない、かつ「自分の善に酔わない」。そういう両面を〈スピ・シン主義〉はもっている。「汚い奴（不正）」に対して、「しかたない」「恐ろしい」などというのではなく、「100%許さない」と言い切る。自分にも汚い面があるからと何もしないのではなく、汚い面があることを観念的に嘆いていても始まらないから、自分が汚い面を持っていることを自覚しつつ「不正を許さない」という立場で自分を追い込む行動をとること、その方向への一歩を踏み出す勇気と行動を称えるのだ。

「闇」を認めることは、「汚い人間」になって居直って何もしなくてもいいということでは全然まったくない。汚い奴が勝って、きれいな奴が負けるというのは許せない。〈スピリチュアリティ〉とは人の悲しみが分かる（＝オメラスから歩み出る：拙稿 [1999]）ということでもあるのだから。

マイノリティの闘い方——攪乱

〈スピ・シン主義〉は、反マッチョ的（つまり女性的）であり、無政府主義的（アナキズム的）である。なぜなら、現行秩序の解体をめざし、現行秩序を信じている人への攪乱をめざす戦略をとるからである。それは、マイノリティのゲリラ的戦い方である。強制されたり規制されたりせず、自由に自分から始まる点に意義をおく。権

47) 1993年、インドネシア・東ジャワで会社に抗議した女性労働者マルシナさん（24歳）が行方不明後、拷問とレイプの跡を残して死体で見つかった。しかし民衆の反応は少なく、知識人も含めて多くの者は恐怖に沈黙した。これに危機感を抱いた女優のラトゥナさんは、大衆の沈黙や知識人の勇気の欠如を批判する「マルシナは訴える」という独り芝居を作り今日まで上演活動を続けている。「怒らない、怒りを表現しないことが軍事独裁を許してきたのです」という。『朝日新聞』1999年1月30日。

力ではなく、なにかしらの反権力的な関係をめざす。歴史的に「男性の領域のもの」とされてきたもの」の価値を見直し、低め、相対的に「女性に配置されてきた価値や領域」を重視する。だが、このことは、現行秩序上位に位置を占めているものにとっては、基盤そのものへの不安となる。したがって、体制派には、こうした立場はつねに「秩序破壊者、過激派、無責任」にみえる。聖職者のおとなしさではなく、無政府主義的ラジカルさが〈スピ・シン主義〉には込められている。

もちろん一方で、私の〈スピ・シン主義〉は、スウェーデンのような、具体的な国家システム改革への変革（具体的制度改革）を提示する。しかし、日本の現状を考えると、そこへいくためには、まずは現行秩序の揺るがしが有効だろうという戦略的感覚がある。理論的には、スウェーデンの組織原理は、各人の自己決定を尊重するシステムであるので、分権的、反権力的、反強制的といえる。日本では、国や自治体（公務員）に任せると官僚的になるので、NGOやNPOによる公的政策をチェックし突き上げるような、民間非営利部門の拡大が実際には重要となってこよう。いずれにせよ、イメージはあまりおとなしいものではない。箱に収まるよりも箱から飛び出そうというのである。

現代日本は、以前にも増して危機感の欠如や潔癖主義、まじめ主義という病が蔓延している。力を奪われ、皆が生命力的に弱くなっている（ノン・エンパワメント）。過食・拒食症、母娘依存症、引きこもり、DVなども、一種の「ノン・エンパワメント」の表われである。日本中が横並びで、消費主義に逃げてばかりである。

だからこそ〈スピ・シン主義〉は、単独者になろうという。秩序が与える共同体・性を超えて「個／ニンゲン」＝「スピリチュアルなシングル」になろうというのである。学者のようではなく（事態の後づけ分析でなく）、スピリチュアル度の高いものを積極的に作ること、行動することを提起する。質の高さ、クリエイティビティー、破壊すること、ルールを破ることを提起する。聖俗、理性・非理性の未分化なところへ、あるいは統合されたところへ、僕らの認識の在り方を高めようという。隠された力に力を与えようという。「樹木の時間」の言葉を使おうという。

スピリチュアル度の高い闘い方

庶民性を忘れないこと。繊細な心や庶民の小さな幸せを願う心を大事にしつつ、それがエゴやナショナリズムにならない様なバランスをとること。自分の中の深いところ（混沌の闇世界）を見る姿勢をもっと深めること。各人が想像力をもっと鍛えること。スピリチュアルなアーティストになること。弱々しいきれいごとにならぬよう、毒も含んで図太く、自由に、想像力をもつこと。政治的な言語や既成宗教の言語でな

く、身体に近い芸術的な、そしてリアルな言葉を紡ぐ努力をすること。社会の周辺に、秩序の下位に、人が悲しむ場所に身を置き、状況に巻き込まれ、そこから発信すること。自然に触れ、人のきれいな心や勇気に触れ、闇・死・沈黙に触れて、光・生・言葉を輝かせること。「状況に流され、社会に飼われ、歳をとって丸くなり、諦め、良識的保守主義になって、生活に追われる」のではなく、夢の力をもって、高い水準から今の社会のニセモノ性を見抜き、もっと突き抜きたい。それらが、〈スピ・シン主義〉の「闘い方」というときに、ぜひとも押さえておきたい両面性、全体性である。ただの「きれいごと」ではないとおもう。

「弱き者」が真に強いということ

非暴力主義が教えてくれるのは、単なる戦術ではない。男らしい、現実的で物質的なく暴力〉という魅力自体への根本的問い直しである。暴力を非難し、平和を唱えることは、一見易しい。多くの人が口ではそれを唱える。だが、それを本当に理解することは、私にはなかなかできなかった。「不正なものと闘う」という、それ自体は正当にみえる概念に突き動かされて、真に闘う相手を矮小化してしまっていたようにおもう。

つまり、「敵が敵だ」と思っていたのである。このとき、私は、暴力の魅力にとりつかれている。暴力というものの真の正体に向き合えていない。敵というものを十分につかんでいない。暴力の影を十分に見ていない。多くの人も、実は暴力への熱狂を内包している。自分の闇をみずに、闇に支配されている。善なるつもりで、他者を、他の生命を、自然を壊してしまいがちながら、そのことに気づこうとしない。自分が全体の一部であるということ、そしてその中で自己決定する責任をもった「部分」であることを自覚しないがゆえに、傲慢に、自己の他者（外部）への暴力性を無視／隠蔽してしまうのだ。

だが、〈スピ・シン主義〉で私の到達点として繰り返し強調したいと思っていることは、「自分自身こそが敵であり、敵の中にこそまた闇と光の両面を持つ私自身がいる」ということである。私が、「敵＝相手」（のみ）に勝つというようなことにこだわることは、私の自分への内省の欠如の現われである。私の内なる優生思想、家父長制、能力主義、成果主義、効率主義の無自覚であり、暴力の意味の深い把握の欠如であり、相手の土俵に乗っていることの無自覚である。あるいは、闇／凶暴性を抱えた私たちが本質的に暴力という土俵に乗っていることの無自覚である。

非暴力闘争とは、実はこの土俵自体との闘いである。暴力とは、私たちの思考そのもののことにほかならない。暴力と闘うという大きな課題は、私の内部との闘いであ

るときにのみ、はじめてその正体をあらわすのである。「きれいな心」で平和を唱えることが「きれいごと」ではないことが理解できるのは、この水準に到達したときのみである。

この特殊で、かつ、本質的に重要な〈闘い〉は、いかなるものによってリードされ、うながされうるのだろうか。それをなしうる可能性を持った人物で、私が知っているのは、体力に優れた大男たちではない。『アオサギの眼』のラズであり、『ゲド戦記Ⅳ：帰還』のテハヌー⁴⁸⁾であり、『ゲド戦記Ⅱ：こわれた腕輪』のアルハ（テナー）⁴⁹⁾であり、『風の谷のナウシカ』のナウシカであり、『モモ』のモモなどである⁵⁰⁾。みな、弱

48) 『ゲド戦記Ⅳ』のテーマのひとつは、女性差別と性暴力であり、男女の関係のみなおし、それによる自己認識の深まりが問題となっている。例えば、馬鹿にされている「マジナイ女」と友達になり、そこから学べるということが示されていることは、女性性の再評価の問題である。弱く、醜く、嫌われ、暴力の犠牲者で、呪われており、本人が悪いとされている子ども（テハヌー）が主人公となること、そこに次の時代の希望があること、つまり、別の基準ですばらしいといえるものが浮き彫りになること、が示されている。ル＝グウィン [1993] 『ゲド戦記Ⅳ 帰還』。

49) 自由／自立は喜びであるが同時に恐怖である。自由を知るからこそ、悪の奴隷となった過去の不自由の歳月を悲しむことができる。逆に言うと、悲しみを知る。自由ゆえの苦しみ、自由の重さを知る。自由は与えられるものでなく、選択するものであり、気楽なものではない。自由は未知なる世界で自己責任によって獲得する闘いの連続なので、支配され命令され制限されることに慣れている者は怯える。実際、アルハは、未知なる世界に怯え、自由の重さにおのき、ゲドを殺すことで再び今までの悪に支配されてきた自分に戻ろうとする。これは自由の恐怖に対する「人間の弱さ」の表われであり、真に自立して生きていくことの困難さを示している。奴隷であることのなんと安穏なことか。唯一絶対と信じている世界、絶対普遍と思っていた世界に身を置き、無意識の闇に身を置き、狂気に身を委ね、なじみのなかで一時の安逸をむさぼるほうがどんな楽なことか。私たちの人生はその誘惑に満ちている。だからこそ、この『ゲド戦記Ⅱ』は、人間らしく生きるとは何たるかを考えさせる。そして、生への願望が、アルハ（テナー）を突き動かし、闇から自立する力を与えたことに、僕たちもまた、教えられるのである。訳者は、あるフランス作家の「真に偉大な事業は、狂気に捕らえられやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間によって、誠実に執拗に地道になされるものです。」という言葉をもって、その自由の奥行きを伝えた。自由は、無知ゆえの強引さではなく、本当に闇の怖さを知っている者の勇気にこそ伴われる。世界には、困難な状況にあっても、より人間らしくあろうとして、自分に対しても世界に対しても愛する人々に対してもより誠実であろうとして、それと知りつつ困難な道を自分の意志で選びとっている人々（テナーたち）がいる。ル＝グウィン [1776] 『ゲド戦記Ⅱ』 191, 211, 213, 225-6 ページ。

50) 『アオサギの眼』、『ゲド戦記Ⅳ：帰還』、『ゲド戦記Ⅱ：こわれた腕輪』はル＝グウィン、『風の谷のナウシカ』は宮崎 [95]、『モモ』はエンデ [76] による。ル＝グウィン [90a] 『世界の合言葉は森』における、アスシー人は、非暴力しか知らなかった。集団で闘うという概念がなかった。なお、暴力と闘うというわけではないが、複雑な現実をしたたかにその幼き視点で明るく生き抜くという意味で、『じゃりんこチエ』(はるき悦巳作)のチエやひらめちゃんも、この同類である。

く、**小**さ**き**者である。しかし、彼女たちは、自分の弱さを知っている。何度もくじけそうになるが、自分にできる唯一のこと、すなわち勇気をもって前に進むのである。そのとき、彼女たちに、「男性のような力（今の社会で破壊と支配を通じて勝者になる能力）」「暴力的な勝利」「家父長制に身を任す生き方をする力」はない。そんな力はない。

あるのは、真実への愛情、「さもしい態度への軽蔑」であり⁵¹⁾、非暴力の力、非権威的な力、無抵抗の強さであり、弱き自分を励ます意志、根底に眠っている強烈な自尊心であり、純粋さであり、偉そうにしない態度など——すなわち一言で言って〈スピリチュアリティ〉——である。だが、そこには、普遍性がある。この世の人間は、実は皆、「小さく弱き者」だからである。自分が弱き者と気づき、暴力的でない闘い方に、〈スピリチュアリティ〉の価値に気づいたとき、私たちはラズやテハヌーに近づけるのである⁵²⁾。

最後に、この「弱き者」は、饒舌ではない。攻撃を仕掛け、無理に多弁によって事態を促進する焦りをもたないものである。自分の心の声を掻き消すほど声高にならず、また声高に話す者に耳を傾けるのではなく、寡黙に、ことが成熟するのを待つことができるのである。『星の王子さま』で、友達が最初少し離れて黙って座り、徐々に近づける日を待つように。『アオサギの眼』でラズとサーシャが、沈黙の絆で結ばれ、ふさわしい言葉が見つかるまでは喜んで待つ人間であるように⁵³⁾。私たちは、この「弱き者」から学ぶことが多いようにおもう。少なくとも私はそうである。この項の最後に、以上の精神を、次のように語るル＝グウィンという言葉で確認しておきたい。

51) ラズは、一見ただのお嬢ちゃんであったが、実は子どもの頃から、真実にむきあう資質の持ち主であった。真実を認める勇気がなく、「権力あるものに告げ口する」というような教師と闘った。14歳で、真実だけを大事にする勇気を持っていた。ル＝グウィン [1990b] 300ページ。

52) これに関連した発想として、「われわれ自身がもう一度無垢になれば、隣人の無垢性もわかるようになる」（ソロー [1995] 下258ページ）というものがある。

また仏教の忍耐や寛容の概念にも、ここでいう「弱き者」の強さの発想と繋がるものがあるように思う。忍耐とは、もともと「抵抗しおおすことができる」ということであり、「自分に加えられた損害に無頓着でなくてはならない」という「寛容」は、危害を加えられても黙っていることではなく、そのできごとから悪い影響を受けることがないようにする、前向きな心の状態のことである。ダライ・ラマ [1998] 171-3ページ。

53) 「二人は沈黙の絆で結ばれていた。…ここで語られるにふさわしい言葉を見つけるまでは、黙って歩きつづけるばかりなのだ。サーシャは喜んで待つ人間の一人だった。」ル＝グウィン [1990b] 377ページ。

「マッチョマンは、合理的でも明瞭でも競争的でも何でもない私たちの流儀を恐れています。ですから彼はそういったものを軽蔑し、否定するよう私たちに教え込んできたのです。私たちの社会の中で、女性は人生のあらゆる側面を生きてきました。そして、それゆえに軽蔑されてきました。人生のあらゆる側面には、無力、弱さ、病気、非合理でとり返しのつかないもの、曖昧で受動的で、押えがきかなく、動物的で、不浄なものすべて——影の谷間、深み、人生の深さも含まれています。そして、そうしたものの一切に対して責任を取ることも、女性の生きてきた人生なのです。武人が否定し、拒否するもの全てが、私たちに残され、私たちとともにそうしたものを共有する男性は、それゆえに私たちと同様、医者ではなく看護の役割しかできず、武人ではなく民間人の、酋長ではなくただのインディアンの役割しか果たせないのです。それが私たちの国なのです。私たちの国の夜の部分です。もし昼間の部分、高い山脈や明るい緑の大草原があるとしたら、私たちは開拓者がそれを語る物語しか知らず、そこにはまだ到着していません。マッチョマンの真似をしたところで、そこに行くことはできません。私たちはみずからのやり方で前進し、そこで生活し、私たち自身の国の闇夜を生き抜くことよってのみ、そこに到着するのです」

（「左ききの卒業式祝辞」⁵⁴⁾）

反・戦争の立場

ドキュメント映画『チェ・ゲバラ——人々のために』（1999年、アルゼンチン映画、マルセロ・シャブネス監督）を観た。今となっては「感じない」人も多いだろうが、当時本当に社会主義の理念を体現しようと、自己改造も含めて、「新しい人間になろう」とする人々がいた。チェもその一人だと思う。それを肯定的に受けとめる私は、以前は無抵抗主義者ではなかった。不当なものとは闘おうと思ってきた。反帝国主義的なゲリラ闘争やレジスタンス闘争は、歴史的に正当なものであったといまでも思っている。

でも、現実には、レジスタンス側の多くは武器も圧倒的になく、虐殺された。今は第2次世界大戦時や60年代よりもっと軍備勢力は強い。今の日本で考えて、武装された軍隊などをもつ支配勢力に対して、武器をもって武力で闘って勝つのはほとんど無理だろう。僕など武器の使い方も闘い方も何も知らない。軍事的闘争的には能力は限りなく低い。「女・子ども」といわれる「足手まとい」グループと同じだ。そういう「弱い者」に一体何ができるのか。「逃げる」しかないではないか。戦争になって侵

54) ル＝グウィン [1991] 197ページ。

略されたら仕方ないではないか。それだけの覚悟をもつのが平和派ということだろう。私はそのような軟弱者で、戦争・軍備強化で戦う気のないやつなのだ。そういうやつがいてもいいではないか。襲われたとき、自分はナイフで応戦せず、逃げるかやられるしかない覚悟をもつ生き方があってもいい。

非暴力・無抵抗主義がそうであるように、何もしないということではない。侵略されたなかで、何らかの現実的抵抗を考えるだろう。「物理的に逃げる」こともその一つの実践肢である。とりあえず逃げたりとりあえず従って、長期的に時間をかけて何らかの抵抗をすることを考えたい。その瞬間だけの勇気に囚われるべきではない。状況によればレジスタンスもありうるかもしれない。殺されることや投獄覚悟で抵抗するかもしれないし、しないかもしれない。あまり勇ましいことはいえない。勇ましいことがいいとはいえない。

最新の武器はすごすぎる。中国と核戦争になったらどうするのか。北朝鮮が核をもったらどうするのか。日本も対抗して核をもつのか。そういうことだ。現代において戦争になるということは、非常に犠牲者が多くなり、その行き着く先は誰も計算も予想もできないということだ。アメリカのイラク攻撃とその後の影響など、何がどうなるかなど誰にも何もわからないのだ。つまり自衛・軍備派のいうことには、私にとってのリアリティがない。戦争はしないという覚悟にしか、私にとってのまともなリアリティはない。

この点で、自民党だけでなく、民主党などの若手議員も危なっかしすぎる。愚かすぎる。人を殺すこと、人が殺されること、痛みがあること、大切な人を失う悲しみ、手足が引きちぎられ、略奪やレイプがあることへの具体的想像力と学習がなさすぎである。

学者も政治家も、熱狂的な好戦論でなければいいと思って、ある種「冷静」にかつ熱心に「国防」「危機管理」や「人権擁護や平和創出のための正しい戦争」を論じる⁵⁵⁾。だが隠れた雰囲気は「ウキウキ」だ。それが透けて見える。戦後日本でのんき

55) 「正しい戦争」とは、開戦理由が国際法と正義・人権と平和創出に基づいており、正当と認められる手続きにのっとって行われ、交戦相手が非民主的な国で、すべての非暴力的な方策を尽くした後の最後の手段で、放置しておく状況がかなり悪くなることが明白で、目的と手段がつりあっており、人々（自国）が受けた被害につりあった規模・手段になっており、戦闘員と非戦闘員が区別され、非戦闘員の犠牲を極力少なくするようにされているものであろう。ミロシェビッチは軍を動かす力をもったヒトラーのような存在であったということから、NATOのユーゴ空爆は、確かに「正しい戦争」と評価できる面がかなり強いものであったといえよう。それでも私は本稿で主張するように、「正しい戦争論」「現実主義」の立場から自衛戦争や独裁

に語られた、覚悟のない、「非武装中立、平和主義、なんでも戦争反対」への反省はあるだろう。だが私はそれを踏まえた上でも、「反・戦争」である。侵略されても仕方ないという覚悟での非武装派である。

個人的にそのような立場を選ぶという私の発想からいえば、日本という国の国際的な位置としても、日本は「のんきな理想主義国家」の位置でいいではないかと思う。つまり、憲法前文や9条の精神を国際的に発信し、軍備・軍隊をもたず、もし侵略されたらあっけなく侵略される立場を選ぶのである。非軍備・非武装・無抵抗で侵略された国と歴史に刻まれることを選びたいと思う。まぬけだと笑われてもいい。私は日本がそのような国になればいいなと夢想する。チェ・ゲバラの思想を現代に生かすのは、そのような「理想主義」的なものではないだろうか。

この考えが多数派になるとは思わない（絶対無理とは思わないが、現実的にはとても難しいと予想できる）。しかし、私が選ぶ価値としては最もマトモだと思う。それが私の〈スピ・シン主義〉的な結論だ。

厳しい「パレスチナーイスラエル対立」という現実のさなかでさえ、イスラエル人平和主義者18歳のアミル・マレンキさんは、「街で誰かに襲われたらどうする」「追いかけてきたら」「相手が殺そうとしてきたらどうするか」と聞かれても、「話し合う。通じなければ逃げる。襲われたら、自分の身を守るために必要最小限の力を使う」と答える。そういう人がいる。

〈スピ・シン主義〉で繰り返し主張するのは、ブッシュ的な「力の発想」への違和感をおしすすめることこそ、人権とか民主主義とか平和といった概念に共感する人が、真に求めているものだということである。「権力、資本主義的搾取、暴力」と一番対抗的なものは、もちろん「勇ましい言葉」などではなく、〈たましい〉の水準で生きることだ。それに近づく道が、沈黙の時間、弱さや喪失を大切にすることだ。言い切って、闘って、非難することは、「力の世界」にまだ巻き込まれている。同じ土俵だ。それは、近代主義的であり、「男性原理」的であり、暴力主義的だ。自信に溢れた熱狂はいつの時代も怪しい。自己のアイデンティティを集団に依存するとき、特に失業や不景気や自信喪失などのなかで不満をもったものたちが、安易に敵（原因）を見出し、それに不寛容を叫ぶようなとき、そこには「〈孤独〉なシングルになること」「深いスピリチュアルな成熟」からの逃避がある。

もっとも「暴力的・権力的なもの」に対抗的なものはなんなのか。それを考えて、

国家転覆のための戦争の正当化を語らない。

私は、あらゆる〈国境〉を超えて、地球レベルのつながりの中で生きたい。リアルな戦争を知って、非暴力主義の発想で、私は〈弱さ〉の価値を選び、迷いや逡巡を尊び、逃げて、逃げて、逃げまくりたい。捕まって、いつか虐殺されるまで。

そのスタンスで、現実の庶民・市民派による「戦争反対」運動の側に立つ。それを馬鹿にするインテリ側（政治家側、メディア側）の「論理」に、私は興味をもたない。

☆ ☆ ☆

最後に内村鑑三の言葉を掲げておこう。彼は、日露戦争を前に「戦争廃止論」を唱えたことによって日本社会から「用なき者」とされたが、彼の思想は、その後良心的徴兵拒否者を生むなど、一部の人に確実に届いた。

「余は日露非開戦論者である許りではない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。爾うして人を殺すことは大罪悪である。爾うして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない。」（『万朝報』1903年6月30日、鈴木範久『内村鑑三日録7 平和への道』教文館）

☆ ☆ ☆

本稿を最後まで闘った人、松井やよりさんに捧げます。（2003年3月10日記）

☆ ☆ ☆

03年3月18日追記

03年3月16日、パレスチナ自治区ガザ南部のラファで、平和支援団体「国際連帯運動」(ISM)メンバーの米国人女性レイチェル・コリーさん(23歳)がイスラエル軍のブルドーザーにひかれて死亡した。彼女は、イスラエル軍によるパレスチナ攻撃を止めさせる活動の一環として、パレスチナ家屋を破壊から守る「人間の盾」としてその家に滞在しており、破壊活動をしようとしたブルドーザーの前に拡声器をもって立ちふさがったが、運転手は意識的に彼女を殺した。彼女たちの勇気ある非暴力行動と、冷酷な軍のそのあまりの対比に、あまりの違いに、あまりの距離に、言葉を失う。世界のあちこちで、多くの場所で、名もなき多くの人々がこのような理不尽な殺され方をしていることの象徴である。

その翌日、ブッシュ米国大統領は、「あなたたちの解放の日は近い」とか「神が米国を祝福し続けますように」などという言葉とともにイラクに事実上の宣戦布告をした。彼が放った言葉で唯一、私の心を捕えたのは「大量破壊兵器をつかったイラク軍兵士は、戦後戦犯として責任が追及される。命令に従っただけとの口実は許されない」との言葉だ。この言葉はブッシュ氏や戦争参加国のすべての人に、そして世界中の私たちに向けられている。そう、戦争に参加・協力した英米軍人や政治家・官僚は皆が

戦犯である。命令に従っただけとの口実は許されない。そしてブッシュを支持し自衛隊派遣も戦費も負担する小泉首相・自民党の言いなりの人々もすべて戦犯である。命令に従っただけ、仕事だった、知らなかった、みていただけ、どうしようもなかったとの口実は許されない。その小泉・自民党政権を支えつづけている日本人全体が戦犯である。その無力感と絶望と責任の自覚の下にのみ、息の長い非暴力主義的な抵抗が続けられる。

「戦場のピアニスト」でも示されたように、ゲッターや強制収容所でなかなか反撃できないのは、逆らう者が見せしめのために殺されるのを見て皆が恐怖感をもったり、我慢していれば何とか生き延びられるのではとの淡い希望をもっていたため等も理由の一つであろう。だが本質的には、ナチスがユダヤ人の尊厳を奪い、思考を奪うことに成功したからこそ、反逆はなかなかおこらなかったのだ。

ある人が紹介してくれたのだが、ユダヤ人強制収容所で、腹をすかした者が、誰かが倒れ死ぬことでその人のパンを奪えると思って死にそうな人の横でその人の死を待っているようなことがあった。それをどう思うか。そうならないような人間になれるか。そう深く問う思想家がいる。一方で、そのような極限状況でも、他者のために自己を犠牲にする人もいた。どちらも人間の真実だ。

だから支配とは、単なる力による押さえ付けではなく、支配されるものがそれを内面化するようにすること、すなわち尊厳を奪うことなのだ。見下されたこと、辱められたこと、暴力を振るわれたことに、屈辱や怒りを感じることができているうちはまだいい。しかし、尊厳をずたずたにされ、思考力を奪われたものは、びくびくするしかできなくなる。怒ることもできない。当然抵抗できない。その状態をナチスは狙ったのだ。そしてそれに成功したからこそ支配は続いたという面があるだろう。圧倒的な理不尽さにさらされると、ちゃちなインテリの理屈や理性など吹っ飛ぶ。暴力によって人は「尊厳という力」を奪われるのだ。

とするなら、本質的な反戦争、反暴力とは、一人でも多くの人が、ひどい状況の中でも自己の尊厳を持ちつづけられるような強靱な自分の芯をもつようにしていくことだろう。圧倒的な「現実」のまえに、簡単に吹っ飛ぶようなものではない自分の尊厳のあり方を確立しなくてはならないと思う。

ドイツを含めた欧州諸国は、戦後、ナチスへの反省を積み重ねてきた。だから多くの映画も作られる。一人一人がある種の「自分の良心」をもつ土壌が耕されてきた。たとえばドイツはそうした反省を踏まえて、何びともその良心に反して、戦争の役務を強制されてはならない（兵役の代わりに役務を行えばよい）という、「良心的徴兵

拒否」を認める規定をもっている。

翻って、日本は、戦争責任をとらず、あろうことか謝罪する必要はない、自虐的になるなど侵略の歴史を改造しようとしている。映画などで日本の蛮行が描かれているものが圧倒的に少ないことは何を意味しているのか。腹をすかしていても、暴力にさらされていても、これだけはするまいという自尊心ある一人一人を育ててこなかった日本は、再び簡単にメディアに煽られて過ちを繰り返すであろう。

その中で、私（たち）は何をすべきか。絶望を通して、それでも反戦を言うものになりたいと思う。非暴力の闘いは長く続く。その長さの覚悟の中で、毎日生きていくことである。

☆ ☆ ☆

03年4月5日追記

本稿の脱稿後、戦争がはじまり、大量のニュースや論評や意見が出されている。ここではその一部にだけ言及しておきたい。

ワシントンポスト紙によると、戦争開始後、米国の大手コンサルタント会社が、ラジオ局やテレビ局に対し、戦争支持の姿勢を打ち出し、反戦的なコメントや反戦運動を伝えないようにアドバイスしていた。「次のことを今すぐ行うように。……泣きたくないような、敬礼を捧げたいような愛国的な音楽。感情を揺り動かせ」、「今は議論を起こすようなコメントをとるときではない。私たちの若者たちが危険と戦っているときに」、「地域の基地にレポーターを派遣せよ。戦争経験者を探せ。「砂漠の嵐」作戦の経験者、軍のリクルーター……」といった具合であった。この会社の専門家は「今「旗を振る」ことは政治的に正しい」と述べたそうだ。

そんな中、ベトナム戦争・湾岸戦争で有名になったピーター・アーネット記者が「ブッシュ大統領のやり方にも異論が強まっている」、「米国の当初の軍事作戦はイラクの抵抗で失敗した」と述べただけで、反米的、非国民的だとの批判が強まり、彼は解雇された。彼はその後「私は戦争に反対ではない」などと弁解していた。また米国での新作コメディ映画「What a girl wants?」の広告ポスターで、主人公がピースサインをしていたことに対し、戦争に配慮してピースサインなしのものに差し替えられる事件も起こった。これらはすべて、民主主義をイラクにプレゼントしてあげようとする米国での話である。

☆ ☆ ☆

反戦運動が高まっている。だが、議論が深まるにつれて、ただ「戦争だけに反対」ということの矛盾に気がつく人が増えて反戦運動の質が深まっていくことだろう。戦争開始前の状態がベストであったわけではない。戦争が終結すればそれで平和な社会

になったわけではない。批判する対象は、戦争を行っている米英や小泉首相だけなのではない。戦争の前にも後にも存続しつづけている人権侵害、暴力を批判し、それを減らしていこうとするのが平和運動なのである。とすれば、私たちは、活動を続けるしかない。自分も含めた、この社会、世界全体に対し、自分にできることをし続けるしかない。そこまで見えていれば、「戦争反対だけ叫ぶのは無責任だ」という批判にもたじろぐことがなくなるだろう。

☆ ☆ ☆

大阪の地でも戦争と暴力に反対するために、黒衣を着て非暴力主義の意思を表すWOMEN IN BLACKの運動が続けられている。キャンドルを灯して沈黙のスタンディングを行なっている（拙稿 [2003a] 参照）。その「沈黙」の意味を〈スピ・シン主義〉的に確認しておきたい。

ただ黙って立っているだけ（デモをするだけ）など、効果がなくムダじゃないか、自己満足にすぎない、仲間内だけでもりあがっているだけじゃないかと考える人がいるだろう。そういう人は「だからロビー活動をするとか、議員を使って裏で交渉するとか、もっと有効なことをすべきだ」とか、「もっと多くの人を動かすものにすべきだ」「現実的に政権政党に入ったり官僚組織に入って内部から改革すべきだ」となりやすい。しかし実際はそれも難しい。そこで、「何でみんな動かないんだ！」と憤り、怒りの気持ちを「大衆」や政治家、官僚などの「敵」に向けることで、自己完結（納得）するというひとつの構図がある。悪いのはあいつらだというわけだ。またそうした発想をもって、マジメにデモをしたり沈黙で反戦を表示して立っていたりすることは、「恥ずかしい」ことのように思えるかもしれない。

だが、私は拙稿 [2003a] で展開したように、新しい運動としては、〈たましい〉をさざなみのように伝えるのがいいなと思っている。その視点を獲得すると、沈黙のスタンディングはいいスタイルだと思える。

どういうことかという、上記したように、反戦ということは、ただ戦争を遂行する権力そのものをどうこうするだけではなく、それを支えている社会の構成員一人一人や身近な環境自体を非暴力的にすることなのだ。だからまず、沈黙の中で私達一人一人が自分を振り返る時間をもつことができるという積極的な意味がある。さらにそうした質をもって沈黙で立っている様子を通行する人が見て、その人が何かを感じ、考えることが重要なのだと思う。

現実政治の一表現であるので、簡単に戦争そのものをとめることはできないということ認めるニヒリズムの上で、自分にできることを考えるというアナーキストのスタイルに至ること。大きく構造を変えるというようなたいしたことはなかなかできな

い。しかし、私はこうだという「表出」はできる。私はこうだと生きて見せる。自分がこの瞬間、スピリチュアルな世界へ深く沈むように、しっとりと生きて見せること。それを見た人がどう思うかはわからないが、見た人が考えてくれればいい。そのとき伝わるのがくたましい。正義を押し付けるのではなく、「私はこう思うけど、あなたは何？」と問い掛ける多様性受容的ニュアンスが「沈黙」にはある。〈弱さ〉にこそ希望があるという覚醒にいたる〈スピ・シン主義〉としては、こうした「沈黙の力」はとても魅力的だ。だから「効果ない、恥ずかしい、ムダだ、自己満足にすぎない」と私は思わなくなった。これもエンパワメントのひとつだと思う。

街中で、たくさんの人が忙しく通りすぎる中で、その中の一人が「沈黙で立っている何人かの人」をみて、自分の内部に何かを感じたとしたら。それもまた世界へのひとつのかかわり方である。それを論理的にも現実的にも、意味のないことと否定しきめることは誰にもできない。

文 献

- ダライ・ラマ [1998] 『ダライ・ラマ、イエスを語る』中沢新一訳、角川書店 (His Holiness the Dalai Lama, The Good Heart by His Holiness the Dalai Lama, The World Community for Christian Meditation, 1996)
- エンデ、ミヒヤエル [1976] 『モモ』大島かおり訳、岩波書店
- 星野道夫 [1997] 『ノーザンライツ』新潮社 ([2000] 新潮文庫)
- 伊田広行 [1999] 「スピリチュアル・シングル——生き方と新しい社会運動の新しい原理を求めて——」『大阪経大論集』50巻第1-3号
- [2003a] 「新しい社会運動の模索——〈スピ・シン主義〉視点からの考察」『大阪経大論集』53巻第5号
- [2003b] 『スピリチュアル・シングル宣言』明石書店
- 片岡義男 [1997] 『日本語の外へ』筑摩書房
- 加藤諦三 [1993] 『続アメリカインディアンの教え』ニッポン放送出版
- ル＝グウィン [1976] 『こわれた腕輪 ゲド戦記Ⅱ』岩波書店 (Ursula K. Le Guin, The Tombs of Atuan, 1971)
- [1978] 『闇の左手』ハヤカワ文庫 (The Left Hand Of Darkness, 1969)
- [1986] 『所有せざる人々』ハヤカワ文庫 (The Dispossessed, 1974)
- [1990a] 『世界の合言葉は森』ハヤカワ文庫 (The Word For World Is Forest, 1972)
- [1990b] 「アオサギの眼」ハヤカワ文庫 (ル＝グウィン [1990a] 所収) (The Eye Of The Heron, 1978)
- [1991] 『世界の果てでダンス』白水社 (Dancing at the Edge of the World, 1989)

- [1993]『帰還 ゲド戦記IV最後の書』岩波書店（原題『テハヌー』: Tehanu, 1990）
（ゲド戦記四部作）
- 松田政男編[1988]『群論 ゆきゆきて，神軍』倒語社
- マイケル・ムーア [2002]『アホでマスケなアメリカ白人』柏書房（原書 [2001] STUPID WHITE MEN）
- 水上勉・灰谷健次郎[1990]『いのちの小さな声を聴け』新潮社（93年新潮文庫）
- 水木しげる[1994]『昭和史①～⑧』講談社文庫
- 宮崎駿[1995]『風の谷のナウシカ』徳間書店（ANIMAGE COMICS ワイド版①～⑦）（原作：月刊『アニメージュ』82-94年連載）
- 鈴木光司[1995]『らせん』角川書店
- ソロー，ヘンリー・D [1995]『森の生活（上）（下）』飯田実訳，岩波文庫（Henry David Thoreau, Walden, or Life in the Woods, 1854）
- ウェルシュ，アーヴィン[1996]『トレイン・スポッティング』池田真紀子訳，青山出版社（Irvine Welsh, TRAINSPOTTING, 1993）
- ウォーカー，アリス[1995]『喜びの秘密』柳沢由実子訳，集英社（Alice Walker, Possessing The Secret Of Joy, 1992）

（本稿は，2003年度大阪経大研究制度による研究成果の一部である。）